



報告書

社会の変動を見据えた教育の目的と手法

【第二部】

2030年SDGs達成年度以降の
教育とは？

令和6年6月28日

日本先進教育研究ラボ

(調査目的)

明治国家の誕生以来、知識詰め込み型の画一的な教育が行われ、日本社会には「正解主義」が蔓延するようになった。

しかし、時を経た今、日本社会は数々の前例のない課題に直面し、従来の延長線上に「正解」を見出しにくく、自らが「課題」「問い」を立て、解決する力が求められている。また、ICT や AI 技術の進展や様々な地球規模の問題の深刻化、それに伴うグローバル化の進展は「世界のどこでも、誰とでも働ける人材の養成」が急務となっている。

公明党神戸市市議団では、令和 3 年度／令和 4 年度の政務調査事業において神戸市の魅力を高めるため「子供達の教育」はどうあるべきか、そのための教育インフラはどのように充実させるべきかを調査研究してきた。神戸の子供たちにこれからどのような教育を提供すべきか、そのためにはどのような教育インフラを整えるべきか。これまでの知見・ネットワークを活かし、さらに今後の文部科学行政の方向性も見据えながら提言をまとめていく。

このテーマに沿って第一部では「教育の不易流行と教育の最先端の動き」について報告書を取りまとめた。第二部では 2015 年に国連で採択された SDGs の達成に向けた教育現場の取り組みと 2030 年以降の新たな教育の在り方について調査報告を行うものとする。

業務の名称：社会の変動を見据えた教育の目的と手法

第一部： 教育における不易流行と教育の最先端の動き 5 年後の学校の在り方とは？

第二部： 2030 年 SDGs 達成年度以降の教育とは？

第三部： 2045 年人工知能のシンギュラリティ時代の学校とは？

【調査の内容】

第一章. SDGs と教育

第二章. 2030 年 SDGs 達成に向けての教育事例

第三章. 取材：和洋九段女子 (SDGs、アントレプレナーシップ)

第四章. 取材：N 高・校長 (通信制・オンライン教育)

第五章. 取材：武蔵野東中・元校長 (インクルーシブ教育)

目次

第1章 SDGs と教育	4
SDGs を真に理解する：ビジョンから行動へのトランスフォーメーション	4
「仮置き of 北極星」を目指す	5
(資料) 我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ 前文	6
第2章 2030 年 SDGs 達成に向けての教育事例	10
SDGs 教育を世界中で推進するユネスコスクールとは？	10
『ユネスコスクールの主な特徴』	10
『ユネスコスクールに参加するメリット』	10
ユネスコが中心となって推進している ESD (持続可能な開発のための教育)	
とは？	11
ユネスコスクールに加盟している湘南学園の ESD 教育	13
「地球学」で SDGs を考える都立武蔵高等学校附属中学校	15
SDGs のウェディングケーキモデル	17
第3章 取材：和洋九段女子 (SDGs、アントレプレナーシップ)	19
127 年の伝統が育む未来 和洋九段女子中学校高等学校の SDGs 教育とアントレプレナーシップ	20
SDGs の思考と個人の取り組み	21
変化する職業観とアントレプレナーシップ	22
実践的なプロジェクトを通じた学び	22
SDGs 教育とアントレプレナーシップの結びつき	23
SDGs 教育とアントレプレナーシップを実現する PBL 型授業	23

第4章 取材：N高・校長（通信制・オンライン教育）	25
【N高 自分らしさを見つける通信制高校】	25
N高とはどのような高校か	26
通信制高校ならではの配慮と工夫	27
リアル感のあるオンラインと生徒の挑戦への願い	28
通信制教育の入学社の変化	31
急速に増えている不登校児童生徒	32
コロナ禍で急速に普及し進化したオンライン教育	35
第5章 武蔵野東中・元校長（インクルーシブ教育）	36
共生社会と「インクルーシブ教育」	36
1. 「インクルージョン」の理念	36
○「インクルーシブ教育」への潮流	37
○日本の「インクルーシブ教育システム」	38
○新しい時代への試み	39
2. インクルーシブ教育	40
○曖昧さへの懸念	40
○学びの相乗効果	40
○「インクルーシブ教育」の教育技術	41
○子どもは子どもから学ぶ	42
○教員の資質	43
3. 共生社会に向けて	44
○「自分らしく」いられない子どもたち	44
○共生社会へのキーワード	45
○ひとつのコミュニティとしての「インクルーシブ校」	46
（参考資料）武蔵野東中学校コード（共生社会に向けた新たな価値観の創造）	49

社会の変動を見据えた教育の目的と手法

【第二部】教育における不易流行と教育の最先端の動き

～2030年SDGs達成年度以降の教育とは？～

教育における不易流行は、変わらない本質的な価値と、時代と共に進化すべき要素を考える上で非常に重要な概念です。21世紀に入り、教育はかつてないほどの変革を迎えています。その中で、持続可能な開発目標（SDGs）は、教育の新たな指針として位置付けられています。2030年のSDGsの達成を目指し、教育はどのように変革し、進化していくべきなのでしょう。この章では、教育における不易流行と最先端の動きを概観し、持続可能な未来を築くための教育の役割と可能性を探究します。

第1章 SDGsと教育

「第1章 SDGsと教育」では持続可能な開発目標（SDGs）は、21世紀の教育に新たな価値観と挑戦をもたらしています。単なる目標の羅列に留まらず、SDGsは2030年以降の未来社会に向けたビジョンと行動計画を提示するものです。本章では、SDGsが教育に与える影響とその意義について「神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 石井雅章先生」の取材内容から考察し、持続可能な社会の実現に向けた教育の役割を探求します。教育の場における『不易流行』すなわち変わらない本質的な価値の保持と時代に応じた変化への対応が、どのようにSDGsの達成に貢献できるのかを見つめ直します。



SDGsを真に理解する：ビジョンから行動へのトランスフォーメーション

SDGsの本質を理解することは重要であり、単に17のカラフルなゴールを知るだけでは不十分です。SDGsには、2030年にどのような世界を目指すかというビジョンがあり、具体的な169のターゲットと、それを測るためのインディケーターが設けられています。これはビジョン、ゴール、ターゲット、インディケーターの一連の枠組みで構成されています。ゴールだけに注目しても一貫性に欠けるため、全体像を理解することが重要です。教育現場では、教師がSDGsの知識を絶対に持つ必要があるわけ



ではなく、むしろこれまでの知識を柔軟に考え、児童生徒と共に学び、行動することが大切です。持続不可能な状況を変えることは容易ではありませんが、世代や立場を超えて新しい仕組みと一緒に作ることが求められます。その意味で、SDGsは単なる「リフォーム」ではなく「トランスフォーム」を目指しています。これは、既存の仕組みに依存しながらも、新しいアプローチを導入するという非常に難しい課題に取り組むことであり、世代を超えた協力が必要だとされています。

「仮置き」の北極星を目指す

持続可能な世界を目指す上で世代間の壁を埋めるには、コミュニケーションを通じてお互いの理解を深めることが重要です。石井先生は、世代間の溝が広がる原因は、大人がこれまでお互いを理解しようとしてこなかった態度にあると指摘します。人間は不完全な存在であることを前提に、互いにコミュニケーションを続けることが大切です。また、石井先生は、30年間環境問題に取り組んできた中で、内側からの変革と外側からの改革の両方を連携させることが重要だと考えています。SDGsの良い点は、ビジョンを共有できることにあり、「北極星」として仮置きながらも具体的な対話を通じて進む方向を見定めることを提案しています。過去にはMDGsがありましたが、SDGsでは人権と環境が統合されており、環境だけに注目していた時期があった石井先生にとって、今は世界と人間に対する視点を変化させる必要があると感じています。環境問題は資源やエネルギーの効率だけでなく、人間の生き方や社会の関わり方の問題であると統合的に捉えることが重要です。

「誰一人取り残さない」というフレーズは非常に重要ですが、この文言だけを強調することには注意が必要だと石井先生は言います。この言葉は、現在の人々が豊かになるために他人や未来の世代を犠牲にしないことを強調しています。ただ「困っている人を助ける」という視点にとどまらず、私たち自身のあり方を見直さなければ、SDGsが目指す「変革」にはつながらないと指摘します。

また、発展途上国が豊かさを追求する際、先進国と同じ道を辿る必要はありません。過去に先進国がしてきたように、環境や社会の格差を無視して豊かになるのではなく、最初からサステナブルな開発を目指すべきです。これまで環境や格差問題を伴った開発を受け入れてきた先進国に比べ、持続可能な開発を直接目指す新興国や地域の方が、豊かさの実現にはむしろ有利かもしれないと述べています。

持続可能な開発の「経済」「社会」「環境」の三側面を同時に実現することが、SDGsの鍵です。これまで人類は、環境の制約内で生活していましたが、技術の進展により、人間は自然を制御できると誤解し、結果として自然環境や社会に負担をかけ続けてきました。歴史的に、人類は一方の側面が強くなると他の側面が犠牲になるというアンバランスな状況を作り出してきました。SDGsが挑戦するのは、この三側面を同時に実現する未踏の地を目指すことです。

「誰一人取り残さない」という理念は、今の自分たちの豊かさを振り返りつつ、未来の世代も同じ視点で捉えていくことが重要です。目指すべき状態を設定し、人と人、人と自然の関係を改革することが求められます。『2030 アジェンダ』と SDGs は、この理想の状態を「北極星」とし、その実現を目指すための道筋を示しています。

レイチェル・カーソンの『沈黙の春』は、人工化学物質の問題への大きなムーブメントを起こしましたが、産業界など強い反発も受けました。これは、気候変動を含む様々な問題に目を背けられなくなっている現在の状況に似ています。人間の想像力を活かし、当事者にならなくてもその立場に立って考え、仕組みを変えることが求められています。

石井先生は学校を学びの場の一つとして考え、「学び」を最上位の概念として位置づけています。学校や教育は様々な学びの手段の一部であり、重要なのは持続可能な世界に向けた良い学びをデザインすることです。その中で、学校や他の教育機関の役割が再定義されるべきで、学校が貢献できる役割を考えることが大切です。SDGs のゴールを既存の学校の枠組みに無理やり当てはめるのではなく、人々がどう学んでいくかを考え続け、学びを通じて世代や立場を超えたつながりを築くことが求められます。

さらに、学んだことを客観視し、必要に応じて手放す「アンラーン」も大事です。知識の固定化を避け、生徒が自由な発想で新しいアイデアを生み出せるようにすることが大切です。過去の開発を見直す際も、その時代の価値観や条件を理解し、現在の基準から再評価する必要があります。

SDGs を学ぶことで、環境や歴史、倫理学など様々な学問への関心が広がります。こうした学びの「問い」が深まることで、専門性が培われ、人々が様々な観点から探究し交流する場として、大学が重要な役割を果たします。このように、教育の場は問いを生み出し、専門性を深めるための基盤となります。

(以下参考資料)

(資料) 我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ 前文

このアジェンダは、人間、地球及び繁栄のための行動計画である。これはまた、より大きな自由における普遍的な平和の強化を追求するものでもある。我々は、極端な貧困を含む、あらゆる形態と側面の貧困を撲滅することが最大の地球規模の課題であり、持続可能な開発のための不可欠な必要条件であると認識する。すべての国及びすべてのステークホルダーは、協同的なパートナーシップの下、この計画を実行する。我々は、人類を貧困の恐怖及び欠乏の専制から解放し、地球を癒やし安全にすることを決意している。我々は、世界を持続的かつ強靱（レジリエント）な道筋に移行させるために緊急に必要な、大胆かつ変革的な手段をとることに決意している。我々はこの共同の旅路に乗り出

すにあたり、誰一人取り残さないことを誓う。今日我々が発表する 17 の持続可能な開発のための目標（SDGs）と、169 のターゲットは、この新しく普遍的なアジェンダの規模と野心を示している。これらの目標とターゲットは、ミレニアム開発目標（MDGs）を基にして、ミレニアム開発目標が達成できなかったものを全うすることを目指すものである。これらは、すべての人々の人権を実現し、ジェンダー平等とすべての女性と女兒の能力強化を達成することを目指す。これらの目標及びターゲットは、統合され不可分のものであり、持続可能な開発の三側面、すなわち経済、社会及び環境の三側面を調和させるものである。これらの目標及びターゲットは、人類及び地球にとり極めて重要な分野で、向こう 15 年間にわたり、行動を促進するものになるう。

人間

我々は、あらゆる形態及び側面において貧困と飢餓に終止符を打ち、すべての人間が尊厳と平等の下に、そして健康な環境の下に、その持てる潜在能力を発揮することができることを確保することを決意する。

地球

我々は、地球が現在及び将来の世代の需要を支えることができるように、持続可能な消費及び生産、天然資源の持続可能な管理並びに気候変動に関する緊急の行動をとることを含めて、地球を破壊から守ることを決意する。

繁栄

我々は、すべての人間が豊かで満たされた生活を享受することができること、また、経済的、社会的及び技術的な進歩が自然との調和のうちに生じることを確保することを決意する。

平和

我々は、恐怖及び暴力から自由であり、平和的、公正かつ包摂的な社会を育んでいくことを決意する。平和なくしては持続可能な開発はあり得ず、持続可能な開発なくして平和もあり得ない。

パートナーシップ

我々は、強化された地球規模の連帯の精神に基づき、最も貧しく最も脆弱な人々の必要に特別の焦点をあて、全ての国、全てのステークホルダー及び全ての人の参加を得て、再活性化された「持続可能な開発のためのグローバル・パートナーシップ」を通じてこのアジェンダを実施するに必要とされる手段を動員することを決意する。

持続可能な開発目標の相互関連性及び統合された性質は、この新たなアジェンダ（以後「新アジェンダ」と呼称）の目的が実現されることを確保する上で極めて重要である。もし我々がこのアジェンダのすべての範囲にわたり自らの野心を実現することができれば、すべての人々の生活は大いに改善され、我々の世界はより良いものへと変革されるであろう。

（外務省による「仮訳」より。<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000101402.pdf>）

4 質の高い教育を
みんなに

目標4

すべての人々への、包摂的かつ公正な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する

Target

ターゲット

- 4.1 2030年までに、すべての女児及び男児が、適切かつ効果的な学習成果をもたらす、無償かつ公正で質の高い初等教育及び中等教育を修了できるようにする。
- 4.2 2030年までに、すべての女児及び男児が、質の高い乳幼児の発達支援、ケア及び就学前教育にアクセスすることにより、初等教育を受ける準備が整うようにする。
- 4.3 2030年までに、すべての女性及び男性が、手頃な価格で質の高い技術教育、職業教育及び大学を含む高等教育への平等なアクセスを得られるようにする。
- 4.4 2030年までに、技術的・職業的スキルなど、雇用、働きがいのある人間らしい仕事及び起業に必要な技能を備えた若者と成人の割合を大幅に増加させる。
- 4.5 2030年までに、教育におけるジェンダー格差を無くし、障害者、先住民及び脆弱な立場にある子どもなど、脆弱層があらゆるレベルの教育や職業訓練に平等にアクセスできるようにする。
- 4.6 2030年までに、すべての若者及び大多数（男女ともに）の成人が、読み書き能力及び基本的計算能力を身に付けられるようにする。
- 4.7 2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。

ゴール4 すべての人々への包摂的かつ公正な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する

Indicator

Goal 4 Ensure inclusive and equitable quality education and promote lifelong learning opportunities for all

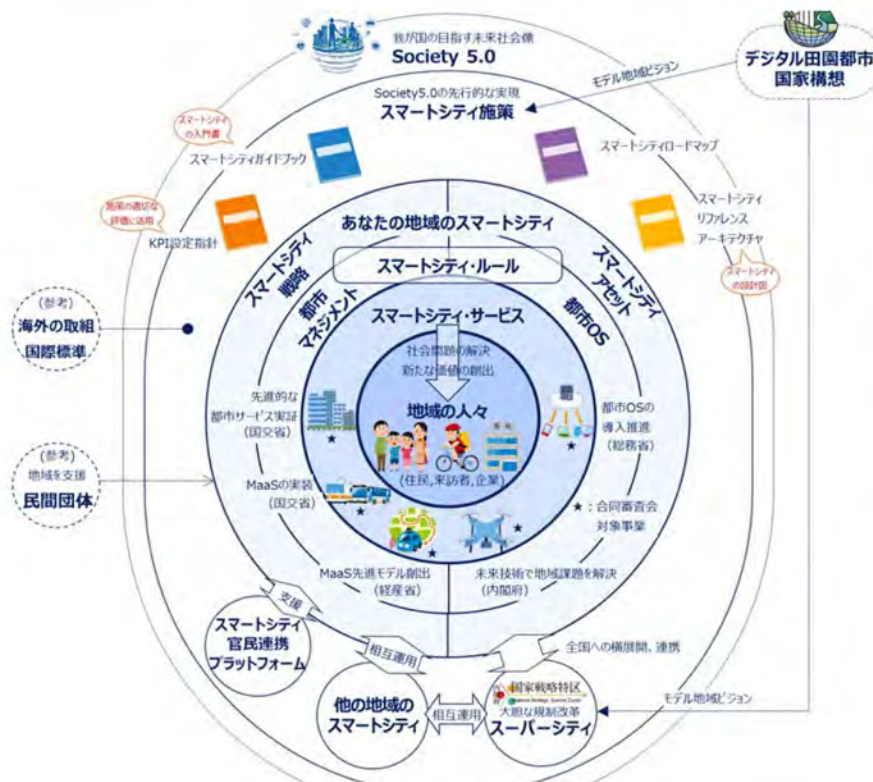
ターゲット Target	グローバル指標名 Global Indicator Name	定義 Definition	下位指標名 Sub Indicator Name	指標設計 Indicator Design	単位 Unit	169.0	169.1	169.2	169.3	169.4	169.5	169.6	169.7	169.8	169.9	170.0	170.1	170.2	170.3	170.4	170.5	170.6	170.7	170.8	170.9	170.10	170.11	170.12	170.13	170.14	170.15	170.16	170.17	170.18	170.19	170.20	170.21	170.22	170.23	170.24	170.25	170.26	170.27	170.28	170.29	170.30	170.31	170.32	170.33	170.34	170.35	170.36	170.37	170.38	170.39	170.40	170.41	170.42	170.43	170.44	170.45	170.46	170.47	170.48	170.49	170.50	170.51	170.52	170.53	170.54	170.55	170.56	170.57	170.58	170.59	170.60	170.61	170.62	170.63	170.64	170.65	170.66	170.67	170.68	170.69	170.70	170.71	170.72	170.73	170.74	170.75	170.76	170.77	170.78	170.79	170.80	170.81	170.82	170.83	170.84	170.85	170.86	170.87	170.88	170.89	170.90	170.91	170.92	170.93	170.94	170.95	170.96	170.97	170.98	170.99	170.100	170.101	170.102	170.103	170.104	170.105	170.106	170.107	170.108	170.109	170.110	170.111	170.112	170.113	170.114	170.115	170.116	170.117	170.118	170.119	170.120	170.121	170.122	170.123	170.124	170.125	170.126	170.127	170.128	170.129	170.130	170.131	170.132	170.133	170.134	170.135	170.136	170.137	170.138	170.139	170.140	170.141	170.142	170.143	170.144	170.145	170.146	170.147	170.148	170.149	170.150	170.151	170.152	170.153	170.154	170.155	170.156	170.157	170.158	170.159	170.160	170.161	170.162	170.163	170.164	170.165	170.166	170.167	170.168	170.169	170.170	170.171	170.172	170.173	170.174	170.175	170.176	170.177	170.178	170.179	170.180	170.181	170.182	170.183	170.184	170.185	170.186	170.187	170.188	170.189	170.190	170.191	170.192	170.193	170.194	170.195	170.196	170.197	170.198	170.199	170.200	170.201	170.202	170.203	170.204	170.205	170.206	170.207	170.208	170.209	170.210	170.211	170.212	170.213	170.214	170.215	170.216	170.217	170.218	170.219	170.220	170.221	170.222	170.223	170.224	170.225	170.226	170.227	170.228	170.229	170.230	170.231	170.232	170.233	170.234	170.235	170.236	170.237	170.238	170.239	170.240	170.241	170.242	170.243	170.244	170.245	170.246	170.247	170.248	170.249	170.250	170.251	170.252	170.253	170.254	170.255	170.256	170.257	170.258	170.259	170.260	170.261	170.262	170.263	170.264	170.265	170.266	170.267	170.268	170.269	170.270	170.271	170.272	170.273	170.274	170.275	170.276	170.277	170.278	170.279	170.280	170.281	170.282	170.283	170.284	170.285	170.286	170.287	170.288	170.289	170.290	170.291	170.292	170.293	170.294	170.295	170.296	170.297	170.298	170.299	170.300	170.301	170.302	170.303	170.304	170.305	170.306	170.307	170.308	170.309	170.310	170.311	170.312	170.313	170.314	170.315	170.316	170.317	170.318	170.319	170.320	170.321	170.322	170.323	170.324	170.325	170.326	170.327	170.328	170.329	170.330	170.331	170.332	170.333	170.334	170.335	170.336	170.337	170.338	170.339	170.340	170.341	170.342	170.343	170.344	170.345	170.346	170.347	170.348	170.349	170.350	170.351	170.352	170.353	170.354	170.355	170.356	170.357	170.358	170.359	170.360	170.361	170.362	170.363	170.364	170.365	170.366	170.367	170.368	170.369	170.370	170.371	170.372	170.373	170.374	170.375	170.376	170.377	170.378	170.379	170.380	170.381	170.382	170.383	170.384	170.385	170.386	170.387	170.388	170.389	170.390	170.391	170.392	170.393	170.394	170.395	170.396	170.397	170.398	170.399	170.400	170.401	170.402	170.403	170.404	170.405	170.406	170.407	170.408	170.409	170.410	170.411	170.412	170.413	170.414	170.415	170.416	170.417	170.418	170.419	170.420	170.421	170.422	170.423	170.424	170.425	170.426	170.427	170.428	170.429	170.430	170.431	170.432	170.433	170.434	170.435	170.436	170.437	170.438	170.439	170.440	170.441	170.442	170.443	170.444	170.445	170.446	170.447	170.448	170.449	170.450	170.451	170.452	170.453	170.454	170.455	170.456	170.457	170.458	170.459	170.460	170.461	170.462	170.463	170.464	170.465	170.466	170.467	170.468	170.469	170.470	170.471	170.472	170.473	170.474	170.475	170.476	170.477	170.478	170.479	170.480	170.481	170.482	170.483	170.484	170.485	170.486	170.487	170.488	170.489	170.490	170.491	170.492	170.493	170.494	170.495	170.496	170.497	170.498	170.499	170.500	170.501	170.502	170.503	170.504	170.505	170.506	170.507	170.508	170.509	170.510	170.511	170.512	170.513	170.514	170.515	170.516	170.517	170.518	170.519	170.520	170.521	170.522	170.523	170.524	170.525	170.526	170.527	170.528	170.529	170.530	170.531	170.532	170.533	170.534	170.535	170.536	170.537	170.538	170.539	170.540	170.541	170.542	170.543	170.544	170.545	170.546	170.547	170.548	170.549	170.550	170.551	170.552	170.553	170.554	170.555	170.556	170.557	170.558	170.559	170.560	170.561	170.562	170.563	170.564	170.565	170.566	170.567	170.568	170.569	170.570	170.571	170.572	170.573	170.574	170.575	170.576	170.577	170.578	170.579	170.580	170.581	170.582	170.583	170.584	170.585	170.586	170.587	170.588	170.589	170.590	170.591	170.592	170.593	170.594	170.595	170.596	170.597	170.598	170.599	170.600	170.601	170.602	170.603	170.604	170.605	170.606	170.607	170.608	170.609	170.610	170.611	170.612	170.613	170.614	170.615	170.616	170.617	170.618	170.619	170.620	170.621	170.622	170.623	170.624	170.625	170.626	170.627	170.628	170.629	170.630	170.631	170.632	170.633	170.634	170.635	170.636	170.637	170.638	170.639	170.640	170.641	170.642	170.643	170.644	170.645	170.646	170.647	170.648	170.649	170.650	170.651	170.652	170.653	170.654	170.655	170.656	170.657	170.658	170.659	170.660	170.661	170.662	170.663	170.664	170.665	170.666	170.667	170.668	170.669	170.670	170.671	170.672	170.673	170.674	170.675	170.676	170.677	170.678	170.679	170.680	170.681	170.682	170.683	170.684	170.685	170.686	170.687	170.688	170.689	170.690	170.691	170.692	170.693	170.694	170.695	170.696	170.697	170.698	170.699	170.700	170.701	170.702	170.703	170.704	170.705	170.706	170.707	170.708	170.709	170.710	170.711	170.712	170.713	170.714	170.715	170.716	170.717	170.718	170.719	170.720	170.721	170.722	170.723	170.724	170.725	170.726	170.727	170.728	170.729	170.730	170.731	170.732	170.733	170.734	170.735	170.736	170.737	170.738	170.739	170.740	170.741	170.742	170.743	170.744	170.745	170.746	170.747	170.748	170.749	170.750	170.751	170.752	170.753	170.754	170.755	170.756	170.757	170.758	170.759	170.760	170.761	170.762	170.763	170.764	170.765	170.766	170.767	170.768	170.769	170.770	170.771	170.772	170.773	170.774	170.775	170.776	170.777	170.778	170.779	170.780	170.781	170.782	170.783	170.784	170.785	170.786	170.787	170.788	170.789	170.790	170.791	170.792	170.793	170.794	170.795	170.796	170.797	170.798	170.799	170.800	170.801	170.802	170.803	170.804	170.805	170.806	170.807	170.808	170.809	170.810	170.811	170.812	170.813	170.814	170.815	170.816	170.817	170.818	170.819	170.820	170.821	170.822	170.823	170.824	170.825	170.826	170.827	170.828	170.829	170.830	170.831	170.832	170.833	170.834	170.835	170.836	170.837	170.838	170.839	170.840	170.841	170.842	170.843	170.844	170.845	170.846	170.847	170.848	170.849	170.850	170.851	170.852	170.853	170.854	170.855	170.856	170.857	170.858	170.859	170.860	170.861	170.862	170.863	170.864	170.865	170.866	170.867	170.868	170.869	170.870	170.871	170.872	170.873	170.874	170.875	170.876	170.877	170.878	170.879	170.880	170.881	170.882	170.883	170.884	170.885	170.886	170.887	170.888	170.889	170.890	170.891	170.892	170.893	170.894	170.895	170.896	170.897	170.898	170.899	170.900	170.901	170.902	170.903	170.904	170.905	170.906	170.907	170.908	170.909	170.910	170.911	170.912	170.913	170.914	170.915	170.916	170.917	170.918	170.919	170.920	170.921	170.922	170.923	170.924	170.925	170.926	170.927	170.928	170.929	170.930	170.931	170.932	170.933	170.934	170.935	170.936	170.937	170.938	170.939	170.940	170.941	170.942	170.943	170.944	170.945	170.946	170.947	170.948	170.949	170.950	170.951	170.952	170.953	170.954	170.955	170.956	170.957	170.958	170.959	170.960	170.961	170.962	170.963	170.964	170.965	170.966	170.967	170.968	170.969	170.970	170.971	170.972	170.973	170.974	170.975	170.976	170.977	170.978	170.979	170.980	170.981	170.982	170.983	170.984	170.985	170.986	170.987	170.988	170.989	170.990	170.991	170.992	170.993	170.994	170.995	170.996	170.997	170.998	170.999	170.1000
4.0	2030																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																							

(参考資料)



(資料)一般社団法人日本経済団体連合会(経団連)

15



スマートシティとは、情報通信技術(ICT)やデータを活用して、都市の機能と住民の生活の質を向上させる取り組みが行われている都市のことです。

(資料)内閣府・スマートシティ

14

第2章 2030年SDGs達成に向けての教育事例

第2章では、2030年のSDGs達成に向けた教育事例を通じて、ユネスコスクールとESD教育の役割を考察します。まず、ユネスコスクールとして知られる湘南学園の取り組みを掘り下げます。湘南学園では、「湘南学園ESD」の名の下に、持続可能な社会の構築を目指す教育活動が展開されています。具体的には、人間の多様性を尊重し、地域社会に協力する意義を学ぶカリキュラムが組み込まれています。さらに、都立武蔵高等学校附属中学校の「地球学」を取り上げます。この学校は、SDGsの複雑な相互関連性を理解するために、自然科学、社会科学、人文科学を融合した教育を行っています。新潟県十日町市での田植え体験を通じ、生徒は持続可能な社会の構築に必要な多角的な視点を養っています。これらの事例を通じて、未来世代が持続可能な開発目標を達成するために必要な教育の在り方を探ります。

SDGs教育を世界中で推進するユネスコスクールとは？

ユネスコスクール（UNESCO Associated Schools）は、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）の理念に基づいて、世界中の学校や教育機関が参加する国際的な教育ネットワークです。このネットワークは、ユネスコの基本理念である「平和の推進」「持続可能な発展」「人権の尊重」「文化の多様性の理解」を学校教育に取り入れることを目的としています。

『ユネスコスクールの主な特徴』

ユネスコスクールに参加する学校は、他国の学校と連携し、国際的な視点を持った教育活動を行います。これには、グローバルな課題に関するプロジェクトや、生徒同士の交流などが含まれます。

ユネスコスクールは、特に持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けた活動を重視しており、教育を通じて地球規模の問題解決に貢献することを目指します。環境保護、ジェンダー平等、貧困撲滅などに関する教育プログラムを推進します。

ユネスコの価値観に基づき、ユネスコスクールは平和と人権の教育に重点を置き、文化的多様性の尊重、異なる背景を持つ人々との共生を促進します。

教員や生徒が積極的に教育プログラムや活動に取り組み、地域社会におけるリーダーシップを発揮することが奨励されています。地域の問題を考え、解決策を探るためのプロジェクトなども行われます。

『ユネスコスクールに参加するメリット』

他国の学校との連携や共同プロジェクトを通じて、異なる文化や視点に触れることができ、ユネスコが提供するリソースや教育プログラムを活用することで、より豊かな学習環境を提供できます。

生徒が地域や世界の課題に対して主体的に関わる機会を得られ、地球市民としての意識を育み、日本や世界各国で多くの学校がユネスコスクールとして認定され、さまざまな教育活動を展開しています。各国での取り組みは異なりますが、いずれもユネスコの理念を中心に、平和や持続可能な発展を目指す教育が行われています。

ユネスコスクールに参加することで、学校全体で国際的な教育や持続可能な社会の実現に向けた取り組みを行う機会が広がります。

ユネスコが中心となって推進している ESD（持続可能な開発のための教育）とは？

ESD（Education for Sustainable Development）、日本語で「持続可能な開発のための教育」とは、未来の地球や社会をより良くするために必要な知識やスキルを身につける教育のことです。この教育の目的は、持続可能な開発を実現するための基盤を築くことにあります。

持続可能な開発とは、現在の世代が必要なものを満たしつつ、将来の世代が同様に暮らせるように資源や環境を守ることを指します。具体的には、環境を汚さずにエネルギーを利用したり、貧困を減らすことが含まれます。ESDは、こうした持続可能な開発を支えるために、環境保護、社会の公平性、経済の持続可能性を学ぶことを目的としています。

教育内容は多岐にわたります。気候変動についての理解を深め、地球温暖化や異常気象への対策を考えることや、水やエネルギー、食料などの資源を大切に使う方法を学ぶことが含まれます。また、人権と平等についての知識を深め、すべての人が尊重される社会を作るための教育も行われます。さらに、文化の多様性を尊重し、異なる文化や価値観と共に生きる方法を学ぶことも重要なテーマです。

教室内だけでなく、実際の生活や地域社会での実践を重視しています。例えば、地域の環境問題を解決するためのプロジェクト学習や、自然保護区や地域の企業を訪れるフィールドワークを通じて、実際の取り組みを学びます。また、生徒同士で意見を交換し、問題解決のアイデアを出し合うディスカッションも行われます。

現代社会では、環境問題や社会的課題がますます複雑化しています。ESDを通じて、次世代のリーダーや市民がこれらの課題に対処できる力を養うことが重要です。持続可能な未来を築くためには、私たち一人ひとりの理解と行動が欠かせません。

具体的な効果としては、環境や社会問題に対する意識の向上、問題解決能力や協力する力の習得、そして日常生活でのエコな選択をする行動の変化が挙げられます。

ESD（持続可能な開発のための教育）は、未来の地球や社会を良くするために必要な知識やスキルを身につける教育です。環境保護や社会の公平性、経済の持続可能性など、多岐にわたるテーマを学び、実際の行動につなげることで、持続可能な未来を築く力を育てます。私たち一人ひとりがESDを理解し、実践することで、より良い社会を作ることができます。

持続可能な開発のための教育 ESD: Education for Sustainable Development

今、世界には気候変動、生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大等人類の開発活動に起因する様々な問題があります。

ESDとは、これらの現代社会の問題を自らの問題として主体的に捉え、人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、**身近なところから取り組む**(think globally, act locally)ことで、問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらし、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動です。

つまり、**ESDは持続可能な社会の創り手を育む教育**です。

ESDはユネスコが中心となって推進している



(資料)文部科学省

ユネスコスクールに加盟している湘南学園のESD教育

湘南学園はユネスコスクールに加盟しており、「持続可能な社会の創り手」を育成する教育活動を「湘南学園ESD」として位置づけています。この教育の中心には「総合学習」があり、中高6年間の発達段階に応じた多様なテーマを設定しています。このカリキュラムを通じて、生徒は人間の生き方や視点、異なる文化に触れることを目指しています。

中学1年生の総合学習では、「命の大切さ」を学び、人それぞれの個性や違いを理解することで、すべての人が願いや努力を持って生きているという意識を育てます。中学2年生では、地域の保護や育成をテーマに、人々が協力し合うことの大切さを体験しながら学びます。中学3年生では、地域社会の持続可能性について考え、それぞれの地域に住む人々の視点や考え方を学ぶ場を提供します。



高校では、社会の様々な問題をより深く学びます。高校1年生は、SDGsを基に、「個人の尊厳」や「生物多様性」、地球環境といったテーマに取り組みます。高校2年生では、社会問題を解決する力を育成し、「人間らしく生きるための主体性」を養います。高校3年生は、「持続可能な未来をつくる主体者」として、社会にどのように参加すべきかを深く考えていきます。

湘南学園ESDの目的は、校内外での学びを統合し、日常のできごとを学びと捉えることで、社会で主体的に行動できる力を養うことです。さらに、ロータリークラブやNPO、卒業生、保護者、地域の方々、他のユネスコスクールと協力関係を築くことで、「開かれた学び」を目指し、ESDの強化と発展に取り組んでいます。

また、グローバル化が進む中で「グローバル市民」や「良き市民」となるための認識や行動を育てることを目指しています。具体的には、自ら問題を見つけて理解し、適切に行動できる力、多様性を認めて他者と共に成長する力、国際的に活躍できる力を生徒が身につけられることを目指しています。

「大学に入りさえすれば」という時代は既に過ぎ、先が見えない不安な時代を生きる若者たちが、自分らしく生きるためには、社会の真実を探究し、「正解のない問い」にも挑戦する力を育む必要があります。それが湘南学園ESDの使命であり、その基盤を中高で築いています。

30年続けてきたESDの到達点 湘南学園中学校高等学校(神奈川県)

湘南学園中学校高等学校の総合学習は、**6年間**の発達段階に応じてフィールドワークや経験、議論をととした体験型実社会で行動できる人になることを目指す、**人格形成のカリキュラム**です。

学年	総合学習のねらい
中学1年	自分と他者、どちらも同じようにかけがえない存在であるという認識を育てる。
中学2年	人々が協力・協働していくためには、対立や意見の違いがあっても、それを乗り越える努力と工夫が必要であるという認識を育てる。
中学3年	自分と他者との違いに気づき、対立を恐れずに話し合ったり、その違いを尊重しあえる気風が大切であるという認識を育てる。
高校1年	自分と社会との関わりを考えながら、真偽を誤へ立つ判断力を身につけるべく、生徒自身が学びの主体者となることを目指す。
高校2年	地球規模の諸課題にも目を向けながら、異なる文化や生き方を尊重し、諸民族が相互に助けあうことの必要性を理解する。
高校3年	社会を支えている人々の生き方に学びつつ、自分が望む未来について考え、広く社会に寄与できる人間性を培う。

20

兵庫県のユネスコスクール加盟校(中学校・高校)

中学校

- ▶ 神戸市立大沢中学校
- ▶ 尼崎市立成良中学校

高等学校

- ▶ 兵庫県立舞子高等学校〔キャンディデート校〕
- ▶ 兵庫県立川西明峰高等学校
- ▶ 兵庫県立但馬農業高等学校〔キャンディデート校〕
- ▶ 兵庫県立兵庫高等学校
- ▶ 兵庫県立篠山産業高等学校
- ▶ 神戸市立葺合高等学校
- ▶ 兵庫県立北須磨高等学校
- ▶ 兵庫県立洲本実業高等学校
- ▶ 兵庫県立三木北高等学校

中等教育学校または中高一貫校等

- ▶ 神戸龍谷中学校高等学校〔キャンディデート校〕
- ▶ 神戸大学附属中等教育学校

こうべしりつふきあいこうとうがっこう

神戸市立葺合高等学校

Kobe Municipal Fukiai High School

種別 高等学校 地区 近畿地区

主な活動分野 生物多様性、海洋、防災・防災、気候変動、エネルギー、環境、文化多様性、世界遺産・無形文化遺産・地域の文化財等、国際理解、平和、人権、ジェンダー平等、福祉、持続可能な生産と消費、健康、食育、貧困、グローバル・シチズンシップ教育²⁾(GCED)、その他の関連分野

「地球学」でSDGsを考える都立武蔵高等学校附属中学校

都立武蔵高等学校附属には、総合的な学習の時間に、SDGsを活用した「地球学」を設けています。「自然科学」「社会科学」「人文科学」を中心に、環境・地域・人間・生命等について、中学の3年間で教科横断的に学ぶもので、中1は基礎、中2は発展、中3は個人課題研究の時期と位置付けられています。その柱は、日本有数の豪雪地帯にして棚田と里山農業で知られる新潟県十日町での農業体験です。中2が田植えを体験し、一部は学校でも育てています。「結い体験学習」という名が示すように、「日本社会の原点である農業から学ぼう」という狙いが明確で、田植えを体験するだけでなく、周辺の環境、生物の観察など米作りを通して自然界へと視野が広がって行くようです。高1では、カードゲームでSDGsの目標を疑似体験した上で、自分たちの身近にあるターゲットを発見し、身近な人に伝える課題にも取り組んでいます。地域巡検、地学巡検、人間と社会、奉仕活動体験など「地球学」に用意されているプログラムは、社会への発信という形となって結実もしています。

学校を象徴する「結い」農業体験学習で都立武蔵高校と同附属中学の校門をくぐると、右手花壇の手前に青いバケツがいくつも並んでいるのを見かけます。覗き込めば、青々とした苗が植えてあります。同中学では独自のカリキュラム、「地球学」の柱となる農業体験として、新潟県十日町市で田植え体験を行い、その際に一部の苗を持ち帰り、学校でも育てているのです。同校ではこの行事を「『結い』体験学習」と呼んでおり、2年生で実施します。附属中学校〔東京都武蔵野市〕では、生徒の創造



性を伸ばす「地球学」が確かな学習効果をもたらし、多摩地区有数の進学校として位置づけられています。2008年に併設型中高一貫教育校として新たに開校した東京都立武蔵高等学校附属中学校は、高校の前身である東京府立第十三高等女学校の設置から数えると、78年の歴史を誇る伝統校です。武蔵野の緑豊かな風土にも恵まれ、素朴で明るい校風が自慢ですが、カリキュラムにも入念な工夫を凝らし、地球規模でものを考えられる、好奇心豊かな生徒を育てています。

学校を象徴する「結い」農業体験学習では、都立武蔵高校と同附属中学の校門をくぐると、右手花壇の手前に青いバケツがいくつも並んでいるのを見かけます。覗き込めば、青々とした苗が植えてあります。同中学では独自のカリキュラム、「地球学」の柱となる農業体験として、新潟県十日町市で田植え体験を行います。その際に一部の苗を持ち帰り、学校でも育てているのです。同校ではこの行事を「『結い』体験学習」と呼んでおり、2年生で実施します。一反という広さの田んぼで2グルー

プが田植えをしますが、一直線に苗を植えるのは初心者にはなかなか難しいです。しかし、念入りな事前講習もあって、生徒らはそつなくこなしています。“結い”とは、小集落や自治体における共同作業の制度を指します。田植えや屋根の葺き替えなど、農村社会には単独で行うには多大な労力と期間、そして費用のかかる作業が多いです。しかし、集落の住民が総出で協力し合って手助けをすれば、いっぺんに片がつくのです。日本では中世以前から行われてきた、そんな風習が結いなのです。こうした相互扶助の精神はとかく大都会では見失われがちですが、これからの教育の軸ともなる「総合知」を豊かに育てるコンセプトです。地球全体について考えるにも、まず日本社会の原点である農村から学ぼうと、都立武蔵は年間50時間ある「総合学習」枠の活用のため、この結いを柱に立てました。

「2泊3日で中日に農業体験をします。900平米くらいの田に2クラスが入り、1mくらいの間隔で縄を張った間に3列ずつ苗を植えていくのですが、みんな初めてなのに上手いもんでしょう。また、3地区に分かれて民泊をするのですが、ステイ先でのお手伝いもします。老夫婦だけという農家が多く、働き手としてかなり当てにもされていて、『ぜひ武蔵の子に来てほしい』といったオファーもあります」

田植えに取り組むにもまずは周辺環境の理解からと、初日には溜め池で水中生物観察もし、生徒がすくったタガメやヤゴなどを識別しては、十日町の里山科学館「越後松之山森の学校キョロロ」の学芸員が解説もしてくれます。そして、草笛を作っては演奏を楽しみます。普段触れることのない大自然の営みに心を躍らせながら、生徒たちはおいしい米がいかに豊かな土壌で育まれるかを知ります。

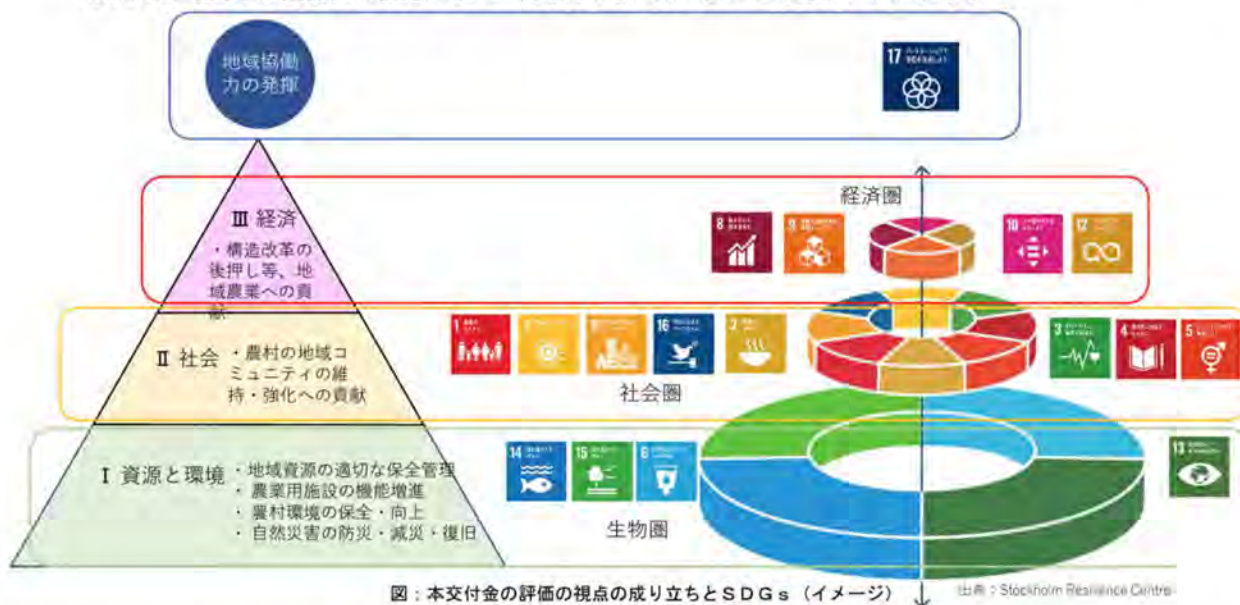
里山農業から地球環境にアクセスします。「事前学習には日本大学の宮地忠幸准教授も参加し、生徒にレクチャーをしてくれます。宮地准教授は中山間地域農業研究の第一人者です。十日町は日本有数の豪雪地帯で、美しい棚田や『里山農業』でも知られています」と言います。そんな十日町に生徒らを連れて行くことには、単なる農業体験以上の意義が認められます。「地球学には本校の目標が多く詰まっている」ことがわかります。それは「一つには文章を読み解き、資料を見ながら分析して考察する力、さらにリーダーとして貢献する力」があります。この地球学では1年のうちは基礎、2年は発展、3年では個人課題研究と位置づけています。すなわち、中1・2段階では広範囲に環境や社会問題について少人数で深く学んだうえで、中3では卒業研究として各人が興味・関心のあるテーマを選んで論文を作成し、発表します。それには、文献を複数読んでまずテーマを設定し、アンケートやインタビュー調査をし、あるいは実験や観察をし、グループワークでディスカッションなどもしたうえで、研究に落とし所をつけねばなりません。その動機づけとプロセスへの示唆が、結いの学習シートには端的に見て取れました。

そもその校是である、「向上進取」と「奉仕」の精神が横溢した学校行事だと言えます。「その後の田の面倒を見るのも、収穫も現地の方任せになります。米は一人1kgずつ自宅で食べるよう送られてきます。お礼状がきっかけで家族同士、交流を続ける生徒も多いようです。」

こうして少子高齢化が一足飛びに進み、過疎化する一方の農村の実情にも生徒は否応なく接することになります。結いは稲だけでなく、他者への慮りをも育てているのです。

SDGsのウェディングケーキモデル

この3つの階層の並び方はそれぞれ意味があり、「経済」の発展は生活や教育などの社会条件によって成り立ち、「社会圏」は下層の「生物圏」、つまりは人々が生活するために必要な自然の環境によって支えられていることを表しています。



（資料）SDGsウェディングケーキモデル ※農林水産省

23

SDGsのウェディングケーキモデルは、持続可能な開発目標（SDGs）の相互関係を視覚的に表現したモデルで、環境、社会、経済の3つの層が段階的に積み重なった構造を持っています。このモデルは、スウェーデンの研究機関、ストックホルム・レジリエンス・センターによって提唱されました。

このモデルの底層は「環境」で、地球の生命維持システムである生態系が基盤として位置付けられています。具体的には、海洋資源（SDG14）、陸上資源（SDG15）、気候変動（SDG13）など、環境に関する目標が含まれ、持続可能な社会の基盤を形成する役割を果たします。

中間の層は「社会」で、人間の基本的ニーズと社会的な福祉が強調されています。これは教育（SDG4）、健康（SDG3）、平等（SDG5）などの社会的目標を含み、人々が質の高い生活を営むための条件を示しています。

最上層は「経済」で、生産性や富の分配、雇用機会を提供して経済活動の維持を保証します。これは経済成長（SDG8）、産業とイノベーション（SDG9）など、持続可能な経済を支える目標が含まれています。

このモデルの特徴は、従来の三角形モデルと異なり、環境、社会、経済が対等ではなく、より制度的・実用的に相互作用する順序を表し、地球環境がすべての基盤であることを強調している点です。持続可能な開発を実現するためには、まず環境を守り、次に社会のニーズを満たし、その上に持続可能な経済を構築する必要があることを示しています。この枠組みは、持続可能な発展のための全体的なアプローチを理解するうえで重要な視点を提供します。

先進的なSDGs教育を行う学校は、単に一つのSDGsの目標を達成するだけでなく、ウェディングケーキモデルに示されるように、相互に関連する課題を同時に考える視点を育んでいることが明らかです。従来の教育が知識の習得に重点を置いていたのに対し、今求められているのは、これとはまったく異なるアプローチであることがわかります。

第3章 取材：和洋九段女子（SDGs、アントレプレナーシップ）

アントレプレナーシップは、イノベーションを推進し、社会に新しい価値を創造する重要な役割を担っています。これにより、新製品やサービスを生み出し、消費者ニーズに応えるだけでなく、経済成長と地域活性化に寄与します。また、社会的課題に対する革新的な解決策を提供し、持続可能なビジネスモデルを通じて社会福祉を向上させます。個人にとっては、リーダーシップや問題解決能力を育む機会となり、経済と社会の両面での変革を推進する不可欠な要素です。

アントレプレナーシップは、SDGs（持続可能な開発目標）の達成において重要な推進力を持っています。SDGsは、貧困の撲滅、教育の普及、ジェンダー平等、気候変動対策など、地球規模の課題に対する具体的な行動指針を示しています。アントレプレナーシップはこれらの目標達成における革新的な解決策を提供する手段として機能しています。

起業家は、持続可能なビジネスを通じて、社会に価値を創造することを目指します。例えば、クリーンエネルギー技術の開発や、持続可能な農業の実践、教育アクセスを改善する新しいプラットフォームの創出などを通じて、具体的なSDGsのターゲットに貢献しています。これらの取り組みは、新しい市場や経済チャンスを生み出しつつ、環境と社会の持続可能性を支える役割を果たしています。

さらに、アントレプレナーシップは地域の経済を活性化し、雇用を創出することで、SDGsの「貧困をなくそう」「住み続けられるまちづくりを」の目標にも寄与します。小規模事業やスタートアップは地元の資源を活用し、地域の課題に即した持続可能な解決策を提供する柔軟性を備えています。

また、起業のプロセスを通じて、ジェンダー平等や多様性の推進にも貢献できます。特に女性やマイノリティが起業することで、ビジネスリーダーシップの場に多様な視点がもたらされ、平等でインクルーシブな経済参加が促進されます。

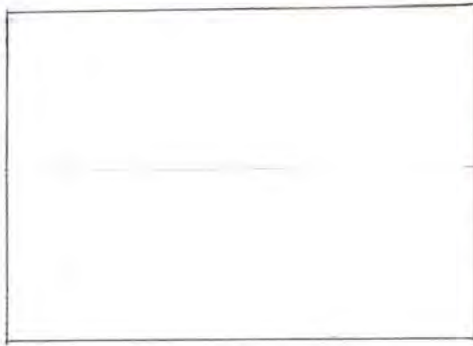
このように、アントレプレナーシップはSDGsの達成に向けて、イノベーションを通じた社会変革を牽引し、持続可能な未来の実現に不可欠な要素となります。これにより、起業家はただの経済的利益の追求者を超えて、より良い地球を築くための重要な担い手としての役割を果たします。

第3章では、和洋九段女子中学校高等学校の取り組みを通じて、SDGs教育とアントレプレナーシップを探求します。和洋九段女子中学校高等学校は、東京都千代田区にある伝統的な私立女子校であり、SDGs（持続可能な開発目標）教育に力を入れています。SDGsの意識向上を目的にしたカリキュラムを導入し、教科横断型学習やプロジェクト学習を通じて問題解決の力を養っています。また、外部専門家によるワークショップやディスカッションを通じて、多角的な視点でSDGsについて考える機会を提供しています。

国際交流活動も活発で、海外研修や国際的なSDGsプロジェクトへの参加を奨励し、グローバルな視野を広げています。校内ではエコ活動やボランティア活動を推進し、地域との連携を深めています。

定期的な成果発表会を通じて活動の振り返りと改善を行い、生徒が持続可能な社会の実現に向けて具体的な行動を起こせるよう支援しています。和洋九段女子は、生徒が社会に出てからも SDGs に取り組みめる力を育むことを目指し、充実した教育プログラムを提供しています。

21世紀型の先進的な教育を行っている 創立127周年の和洋九段女子（東京）



プレゼンテーションに慣れている生徒たち。
質疑の際、否定ではなく、建設的に議論する姿勢を学びます。

和洋九段女子中学校高等学校では、少しでも多くの生徒にさまざまな体験を通じ、喜びと出会ってもらうことを大切にしている学校です。

「つながる学び～Connected School～」をテーマに、学校の中はもちろんのこと、さまざまな良い人、良いものと出会いつながってゆく体験によって、未来につながる新しい自分とめぐり会えることに力を注いでいます。

そして、良い出会いを生かし社会とつながるために、世界標準のリベラルアーツ教育をバックグラウンドにし、語学教育、ICTスキル、PBL型授業で新しい能力を身につけます。

127年の伝統が育む未来 和洋九段女子中学校高等学校のSDGs教育とアントレプレナーシップ

2024年に創立127年を迎えた和洋九段女子中学校高等学校は、伝統に根ざしながらも、未来を見据えた革新的な教育を展開しています。同校が掲げる「コネクテッドスクール（外とつながる学校）」の理念のもと、校内外の多様な人々や環境との交流を通じて、日常を超えた新しい視点や刺激を受け、創造的な学びを生み出しています。

今回のインタビューでは、SDGs教育とアントレプレナーシップに焦点を当て、この学校がどのように生徒一人ひとりに「未来を切り開く力」を育てているのか、中学校教頭の本多ゆき先生に詳しくお話を伺いました。和洋九段ならではの教育が、これからの社会でどのように生徒たちを輝かせるのか、その一端をご紹介します。

変化のスピードと子どもたちの未来

2030年のSDGs達成は現実的に難しいとされる中で、最も影響を受けるのは今の子どもたちです。大人世代は未来をそこまで深刻に捉えず、「何とかなるだろう」と考える傾向がありますが、時代の変化のスピードが速い現代では、子どもたちがその波をいち早く感じ取っています。

かつては時代の変化がゆっくりと進みましたが、現在はそのスピードが格段に速くなり、特に子どもたちは数年ごとに新しい環境に適応しなければなりません。2030年までにSDGsが達成されるかどうか議論される中、子どもたちは不確実な未来を生き抜くために柔軟な思考を持つ必要があります。

大人たちが10年や20年先のことを心配するよりも現在に安心しているのに対し、子どもたちは将来に対する不安を抱えているのです。そうした未来を見据える力を育むために、SDGs教育は欠かせないものとなっています。

SDGs教育の意義



今回インタビューした本多ゆき先生

2030年までにSDGsを達成することは現実的には困難と思われますが、達成が必須とする思考は0か100かの考え方だと思います。個人ベースで**自身が抱える問題をSDGsのフィルターを通して考えることが重要**です。

SDGs達成が難しそうだから諦めるのではなく、**一人ひとりができる範囲で取り組む**ことで、2030年以降の次のアジェンダに繋がると思います。

SDGsの理念を単なる象徴としてではなく、中高で先進的なSDGs教育を受けた生徒が大学でもリーダーシップを発揮し、様々な課題に取り組むことで、将来的な社会貢献に繋がれることを期待しています。

27

SDGsの思考と個人の取り組み

SDGsを単に「達成」することが目的ではなく、その精神を日常生活にどう活かすかが大切です。和洋九段女子中学校高等学校では、この理念を生徒一人ひとりが理解し、行動に移すことを重視しています。

2030年までにSDGsを完全に達成することは難しいかもしれませんが、重要なのは0か100かという考え方にとらわれず、個々のレベルでできることを積み重ねていくことです。和洋九段女子中学校では、生徒がSDGsをフィルターとして日常の課題に取り組み、次のステップに繋げることを目指しています。

生徒たちは、中高での先進的なSDGs教育を通じて、自分たちが社会に貢献できる存在であることを認識し、将来的にリーダーシップを発揮する力を養っています。

変化する職業観とアントレプレナーシップ

現代の若者は、職場や社会の変化に対する適応力が求められています。「一つの会社にずっと勤める」時代は終わりつつあり、自分自身の価値をどのように発揮するかが重要です。

以前は、終身雇用が当たり前とされていましたが、現在の若者たちは「この職場での未来が見えない」と感じた瞬間に、ためらわずに次のステップに進む傾向があります。このような流れの中で、和洋九段女子中学校高等学校では、アントレプレナーシップを養う教育を重視しています。

アントレプレナーシップとは、自らの強みを活かし、新たな挑戦に踏み切る力を指します。生徒たちが自分自身に何かできるという自信を持ち、経験を通じてアイデアを形にするスキルを磨くための「仕掛け」を用意しています。

アントレプレナーシップ教育の意義

生徒には、将来の選択肢として
会社で働く以外に、自らビジネス
を立ち上げる道もあることを
伝えたい。



成城大学との共同プロジェクトで、高校1年生が長野県飯綱町・芋井地区で研修旅行を行います。

研修では農業体験や地元の方々への聞き取り、成城大学の教授や学生とのディスカッションを通じて、地方創生の具体的なアイデアを考え、アクションを起こすことを重視しています。

文化祭で研修成果物を発表し、地元に提案し、商品化へと進めます。例えば、高校3年生はリンゴを使ったシードルのラベルコンテストを行い、選ばれたデザインのシードルが販売されるという成果を上げました。この経験が次のアクションへと繋がることを期待しています。

28

実践的なプロジェクトを通じた学び

成城大学との共同プロジェクトで、高校1年生が長野県飯綱町・芋井地区で研修旅行を行います。研修では農業体験や地元の方々への聞き取り、成城大学の教授や学生とのディスカッションを通じて、地方創生の具体的なアイデアを考え、アクションを起こすことを重視しています。

文化祭で研修成果物を発表し、地元に提案し、商品化へと進めます。例えば、高校3年生はリンゴを使ったシードルのラベルコンテストを行い、選ばれたデザインのシードルが販売されるという成果を上げました。この経験が次のアクションへと繋がることを期待しています。

新型コロナウイルスの感染拡大で修学旅行の中止という困難をも、学びのチャンスに変えています。生徒たちが主体的に取り組むプロジェクトが、生徒の創造力と実行力を育てる一助となっています。

例えば、修学旅行が中止になった際には、代わりに衣装を考えるプロジェクトが立ち上がり、生徒たちはさまざまなシチュエーションに合わせた服装をデザインしました。このような具体的なテーマは生徒の興味を引きつけ、彼女たちが自分のアイデアを自由に発揮する場を提供します。

また、125周年記念グッズの開発プロジェクトでは、新しいロゴを使った商品アイデアを生徒たちに提案させ、彼女たちの意見を尊重しながら実現に向けたプロセスを経験させました。このような活動を通じて、生徒たちは自分のアイデアを現実のものにする達成感を味わい、価値ある発信を行う力を養っています。

SDGs 教育とアントレプレナーシップの結びつき

SDGs 学習は、持続可能な社会の実現に向けての取り組みであるだけでなく、生徒たちにアントレプレナーシップを育てる貴重な場でもあります。

和洋九段女子中学校では、SDGs の教育が単なる知識の習得にとどまらず、生徒たちが自ら行動する力を養うための実践の場となっています。SDGs というフィルターを通して社会を見つめ直すことで、新たな課題が浮かび上がり、その解決に向けて生徒たちがアントレプレナーシップを発揮しています。

企業においてもアントレプレナーシップが重要視されており、新たな価値を生み出すための挑戦が行われています。和洋九段女子中学校では、生徒たちがこうした挑戦を自らの未来に活かせるよう、多様な選択肢を提供し、持続可能な社会のリーダーとなる力を育てています。

全教科PBL型授業

和洋九段女子では、**PBL(Problem Based Learning)型授業**を通じて、生徒の自由な発想力と論理的思考力を育む教育改革が進められています。この授業法は全教科・全学年で実施されており、批判をせずに意見を述べる環境を整え、生徒一人ひとりが安心して参加できるようにしています。

「PBL型授業は高い成果を上げており、生徒たちの積極性と成長を促す」と述べています。**PBLを通じて生徒同士の協力体制や絆が深まり、互いに得手・不得手を理解し合いながら学ぶことができる土壌が築かれています。**

さらに、1人1台のタブレットを活用したSTEAM教育や、教科横断・学年縦断型のPBL授業が行われており、多様な体験や人間関係の構築を助けています。これにより、校内はより明るく活気に満ちた雰囲気となっています。

Problem Based Learning

単元課題の提示
共通認識の獲得
Trigger Question (内発的探究心を刺激)
自分の考えを構築
グループディスカッション
Presentation (教室全体で共有)
レポートの作成

26

SDGs 教育とアントレプレナーシップを実現する PBL 型授業

和洋九段女子中学校高等学校では、PBL (Problem Based Learning) 型授業を通じて、生徒の自由な発想力と論理的思考力を育む教育改革が進められています。この授業法は全教科・全学年で実施

されており、批判をせずに意見を述べる環境を整え、生徒一人ひとりが安心して参加できるようにしています。

PBL 型授業は高い成果を上げており、生徒たちの積極性と成長を促し、PBL を通じて生徒同士の協力体制や絆が深まり、互いに得手・不得手を理解し合いながら学ぶことができる土壌が築かれています。

さらに、1人1台のタブレットを活用した STEAM 教育や、教科横断・学年縦断型の PBL 授業が行われており、多様な体験や人間関係の構築を助けています。これにより、校内はより明るく活気に満ちた雰囲気となっています。

（文部科学省資料より）グローバルアントレプレナー育成促進事業（EDGEプログラム）

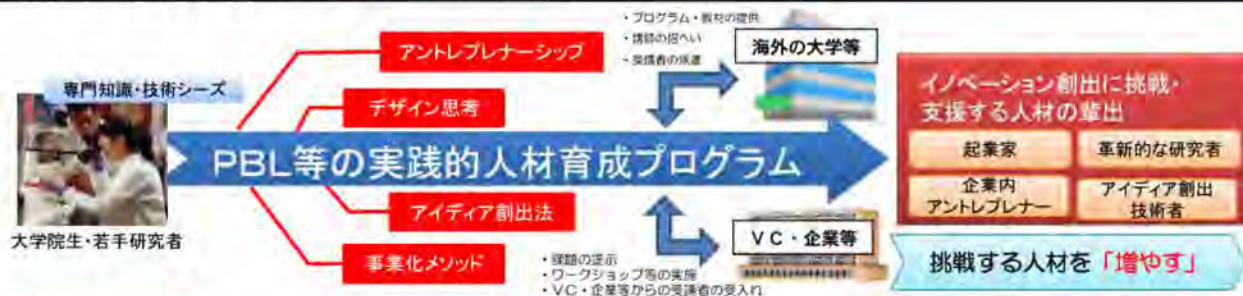
グローバルアントレプレナー育成促進事業（EDGEプログラム）

現状分析・課題

- 我が国の成長の原動力となるイノベーション創出を推進するためには、専門分野を持ちつつ、幅広い視野や課題発見・解決能力、起業家マインド、事業化志向を持つ人材を育成し、大学発ベンチャーや産業界での新規事業創出を促進することが必要。
- 専門知識や研究開発力を持つ人材は育成されてきたが、ベンチャー業界に飛び込む人材や企業内でイノベーションを起こす人材へのニーズが急増。
- 大学とVCのネットワーク等、大学発ベンチャーが成長するための環境（イノベーション・エコシステム）が未発達。

事業の概要

- **取組内容**：海外機関や企業等と連携し、起業に挑戦する人材や産業界でイノベーションを起こす人材の育成プログラムを開発・実施する大学等を支援
【プログラムの例】
・ベンチャーキャピタリスト、メーカー、金融機関や大学を巻き込み、事業化メソッドや起業家マインドを若手研究者が取得するプログラム
・デザイン思考や異分野融合型のアプローチで解決を図るPBL(Project Based Learning: 問題解決型学習)等を中心としたプログラム
- **受講対象者**：大学院生・若手研究者・ポスドク等。ただし、採択機関外にも開けていることが条件。
- **採択機関数・補助事業期間**：13機関・3年間（平成26～28年度）



期待される効果

- 専門知識や研究開発の素養を持ち、課題発見・解決能力、起業家マインド、事業化志向を身につけ、大学発ベンチャー業界や大企業でイノベーションを創出する人材を育成。
- 我が国におけるVC・企業・大学・研究者間のネットワークを強化し、持続的なイノベーション・エコシステムを構築することで、大学発ベンチャーや新事業創出の素地を醸成する。

我が国の起業家・イノベーション人材育成の促進とイノベーション・エコシステム構築のため、共通基盤事業の取組を行う機関を選定し、日本全体の取組を強化。

- ・ノウハウ共有、カリキュラムの深化、指導者養成
- ・民間企業を含めたネットワークの強化
- ・全国的なイベントの実施による起業・イノベーションの促進

単独機関では不可能なカリキュラムの開発とイノベーション・エコシステムの構築を実現

以上、和洋九段女子中学校高等学校の取り組みを通じてSDGs教育とアントレプレナーシップを探究しました。

第4章 取材：N高・校長（通信制・オンライン教育）

2030年、SDGs 達成年度を迎える頃、教育の風景は大きく変わり、通信制・オンライン教育が教育の主流として確固たる地位を築いている可能性があります。デジタル技術の進化とグローバル化の深化が相まって、場所や時間に制約されない学びのスタイルが求められ、教育における伝統的な枠組みを超えた新たな可能性が開花しています。こうした中、N 高等学校のような通信制・オンライン教育を推進する学びの場が注目を集めています。

N 高等学校は、高度な IT 技術を駆使し、個々の生徒のニーズに合わせた柔軟なカリキュラムを提供しています。従来の教室では実現しにくかった多様な学び方を可能にし、自己学習型でありながら、個別の指導や同世代との交流も大切にした教育手法が特徴です。このレポートでは、N 高等学校の校長を取材し、通信制・オンライン教育が持つ意義や、その未来についての見解を深掘りしていきたいと思います。

通信制とオンライン教育の最大の魅力は、自己主導型の学習設計によって、生徒一人ひとりの興味や状況に応じた教育が実現可能な点です。例えば、プロスポーツ選手を目指す生徒や、音楽・アートの分野に力を入れる生徒、さらには、勉学以外の活動と両立を図りたい生徒にとって、これらの教育形態は、自分のペースで学び続けるうえで重要な選択肢を提供します。

本レポートでは、N 高等学校がどのようにしてこれらの教育のメリットを最大限に引き出し、生徒の可能性を広げているのか、その取り組みと試みを探りつつ、未来における教育の新たな可能性を模索します。これにより、通信制・オンライン教育がもたらす社会的なインパクトと可能性を明らかにし、私たちが指し示すべき未来の教育の方向性を提示していきます。

【N 高 自分らしさを見つける通信制高校】

日本先進教育研究ラボ 主任研究員 石坂 康倫（石坂教育研究オフィス所長）

沖縄県那覇市に本校がある N 高は、学校法人角川ドワンゴ学園が運営する高等学校の一つで、茨城県つくば市には同学園が運営する S 高等学校（以下、S 高）があります。さらに、2025 年度には新たに群馬県桐生市に R 高等学校（以下、R 高）も開校予定で、同じ方針のもとで教育が行われ、学べる内容や学習のカリキュラムは同じとなっており、各校の生徒たちは一緒に学んでいます。

このレポートは、N 高について奥平博一校長にインタビューしたものをまとめました。

通信制を立ち上げた経緯

「学習についていけないとか不応を起こしたとか、問題行動を起こしたりしただけで、その子たちが否定されるのが悔しかった。実際に生徒と会うと、通信制の学校に行くことで自立してやり直せる子供たちが多く感じています」

今回インタビューをしたN高・奥平校長



夜も耳元にスマホを置いて寝るなど一日中何が起っても直ぐに対応できるようにしているとのこと。何しろ全国津々浦々に在校生がいますから、そのご苦労は想像を絶するものがあると思います。

私は別の通信制に関わっておりました。若かった頃からずっとその可能性を感じておりました。一番最初に感じたのは、通信制というのは社会的な評価が低いことです。昔でいえば定時制、そして今も一部その評価が続いているかもしれませんが、普通科全日制が基本という時代でした。

しかし通信制には自らの目標を持って日々頑張っている生徒が多くいました。その評価をもっと上げていきたいという思いがありました。

また、通信制の可能性も感じていました。たまたま角川グループに通信制の提案をする機会を頂き、プレゼンしました。ドワンゴが通信と教育を融合させることで面白いということで取り上げられ、学校法人を設立してスタートしました。それが高校の立ち上げの経緯です。

N高とはどのような高校か

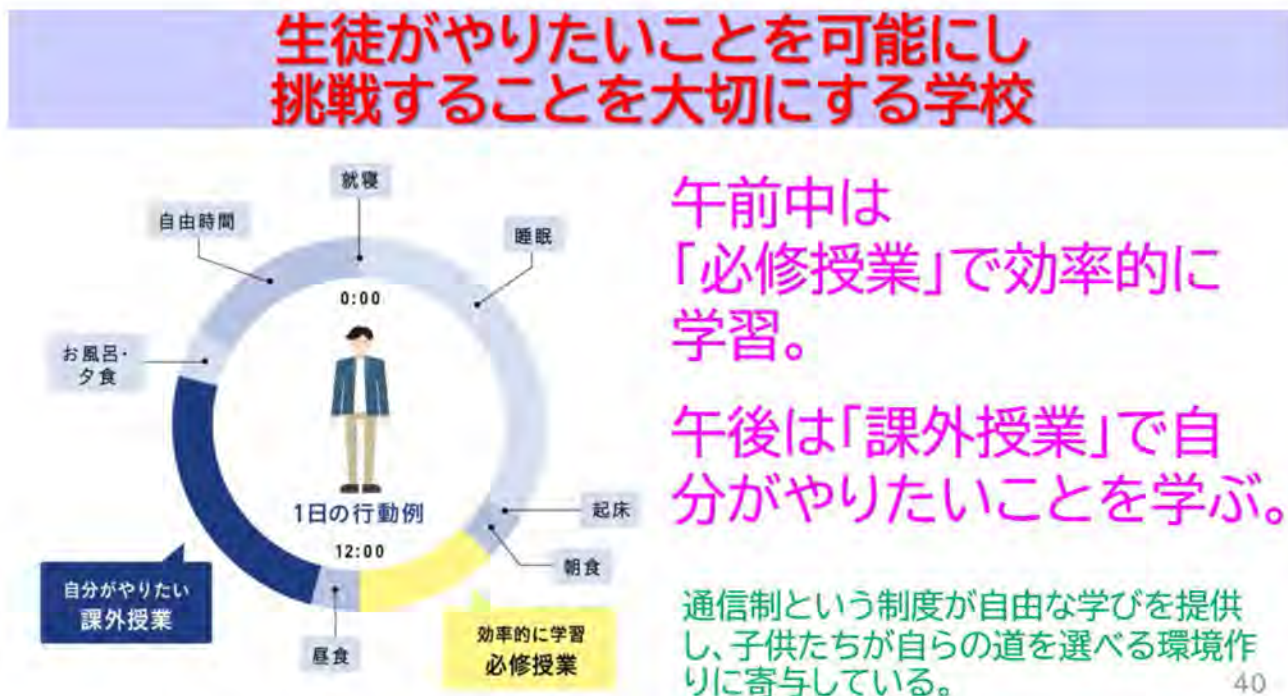
N高は、通信制の高校で、現在S高とあわせて約30000人の生徒が在籍しています。これだけ多くの生徒がいるため、さまざまな心配事や課題があるかと思いますが、奥平校長先生は常にスマホを手元に置き、何が起ってもすぐに対応できるようにしています。その全国に広がる生徒たちへ深い愛情を持ち、日々奮闘する校長先生の姿に感銘を受けました。

N高には、いろいろな背景を持つ生徒が集まっていますが、その多様性こそが学校の魅力です。奥平校長先生は、生徒一人ひとりの可能性を信じており、多くの生徒がこの学校に入学して良かったと感じています。また、通信制高校に対するネガティブな見方も少なくなってきました。

N高では、オンライン学習が主となりますが、これによってコミュニケーションが苦手な生徒も自分のペースで学ぶことができます。校長先生曰く、「学力不足や心の問題を抱える生徒もいないわけではありませんが、適切なケアを行う体制が整っており、一般の高校生と変わりません」とのことです。

また、N高に入学したことで大学への進学が可能になった生徒も多くいます。奥平校長先生は「高校生は自分で考えて行動する力を持っています。制限を緩めることで、生徒はより自由に、自主的に学べるのです」と説明してくれました。N高では、生徒が主体的に学ぶ環境が整えられており、それが生徒たちの成長に大きく役立っています。

今後、通信制高校の認知度をさらに上げ、その良さと効果を広めることが重要だと感じました。N高では、自己肯定感を高め、自信を取り戻すことができる環境が整っており、多くの生徒が自分の夢や目標に向かって挑戦しています。



通信制高校ならではの配慮と工夫

N高は、通信制高校の中でも特に際立った特徴を持っています。どの通信制高校もN高のように成功するわけではありませんが、その理由はどこにあるのでしょうか？

まず、N高は明確なビジョンと生徒への温かな思いがあります。さらに、組織体制や教育方法、オンライン教材の質に力を入れています。そのおかげで、生徒たちは安心して学ぶことができます。

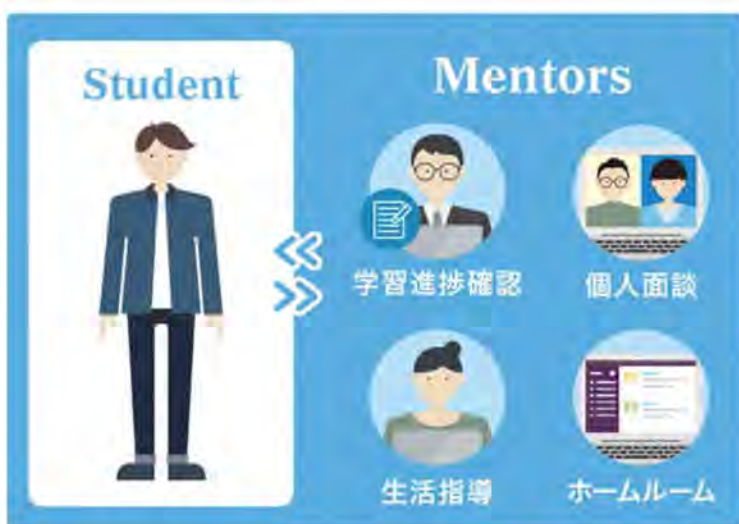
N高は2016年4月に開校しました。今年で9年目の新しい学校ですが、すでに多くの生徒に支持されています。開校当初は約1500人の生徒が入学しましたが、現在はS高とあわせて約30000人もの生徒が学んでいます。この数字からも、N高の人気と信頼が伺えます。

N高には、公立高校や私立高校から転職してきた先生も多くいます。特に、30代の若い先生が多く活躍しています。ある先生は「以前の学校では、生徒に問題があるとすぐに退学させようとする風潮があったけれど、それが納得いかなかった」と話していました。このような先生たちが集まるN高では、生徒一人ひとりに寄り添った教育が行われています。

N高では、オンラインでの授業が主です。生徒たちはオンラインに慣れているため、特に抵抗感なく学ぶことができます。また、オンラインを通じて対面コミュニケーションが苦手な生徒も他の人と交流できるようになっています。

N高は、単なる不登校生徒や退学者のための学校ではなく、新しい形の高校入学の選択肢として認識されています。生徒一人ひとりの個性や希望に合わせた学びが実現できるN高を、ぜひあなたの進路の一つとして考えてみてください。

メンター制度で 生徒の学習やスクールライフをサポート



生徒の成長を支える

メンター制度

N高グループでは、生徒が主体的に考えて行動できるようにメンター制度を取り入れています。所属コースにかかわらず全ての生徒に複数のメンターがつき、生徒の相談内容によって最適なメンターを配置。コミュニケーションツールやビデオ会議システムを用いて生徒の学習やスクールライフをサポートします。

※ 通学コース・通学プログラムコースでは、各キャンパスでメンターが生徒を対面でサポートしています。

様々な専門家がいる⁴¹

リアル感のあるオンラインと生徒の挑戦への願い

N高は、新しい教育の形を提供する通信制高校です。校長の奥平先生は、「N高とS高には約30000人の生徒が在籍しており、これは教育の新たな形を示しています」と自信を持って語ります。さらに、「教職員は専門チームに分かれ、留学や生徒指導など、それぞれの分野で連携して教育を進めています」とも言います。

メンター制度で 生徒の学習やスクールライフをサポート

私たちも教員の役割を分業制にし、専門チームを設けています。

例えば、留学や生徒指導の専門チーム、心理士資格を持つ職員や警察官経験者による生徒指導チームなどです。

このように、教員も専門家のアドバイスを受けながら、組織全体で子供たちを支えていく体制を作り上げています。これが次のステップに進むために重要な要素だと思っています。

（N高・奥平校長）

42

N高では、通信制高校という特性を活かし、さまざまな学びの選択肢を提供することにも挑戦しています。その一つが「通学コース」です。キャンパスに生徒が集まり、対面でPBL（課題解決型のプロジェクト学習）やグループディスカッションなどの学習を行うコースで、週1日、3日、5日の通学日数を選択でき、全国に69箇所の学びの場を用意しています。これによって、生徒が学びやすい環境を作り出しています。

また、奥平校長先生は「オンラインで実際のリアルな学校を再現する」という目標を持っており、それがN高の特徴の一つです。オンラインと実際の現場の両方で行われる職業体験や、オンライン展示と幕張メッセで開催されるイベント「ニコニコ超会議」内で行われるリアルな文化祭「磁石祭」など、現実感のある学びの場を提供しています。30000人が集まる文化祭は、想像するだけでワクワクしますね！

N高では、ICT技術を駆使して、リアルな体験とオンライン学習を融合させ、生徒がより良い時間を過ごせるように工夫しています。もちろん、高校卒業に必要な授業と単位取得はきちんと行っています。

リアル感のあるオンライン教育を追究し リアルな体験も重視

必修授業は主に“ネット学習・スクーリング・テスト”の3つです。

この3つが高校卒業資格の取得に必要な学習です。



どのコミュニティでもコミュニケーションを取るのが苦手な人はいます。N高校のような通信制高校の学校があることで、学校や社会から除外されてしまいそうな高校生が可能性を追求して生き生きとした学びができるのではないのでしょうか。（奥平校長）³⁹

最後に、奥平校長先生は「生徒が挑戦すること」に強いこだわりを持っています。生徒が自分のやりたいことを見つけ、それを達成できるようにサポートすることを大切にしています。そのため、N高は、生徒がなりたいたい自分になるための挑戦を応援する場所です。

（取材後記）今回のN高の取材を通して、私が感じたこと。

N高の奥平校長先生は、強い教育愛を持ってこの学校をリードしています。教職員も一生懸命に頑張っており、その結果、N高は多くの生徒に支持されています。さらに、2025年度には新しいR高が桐生市に開校され、奥平校長が学校長を兼務することになります。

N高の魅力は、生徒一人ひとりの可能性を大切にし、さまざまな個性を受け入れていることです。学校や家庭や社会が多様性を受け入れて生徒たちを支えることで、本来の教育の姿が見えてくるのだと思いました。今回の取材では、奥平校長先生からたくさんの教育活動のヒントをいただきました。

この記事を読んでいる中学生や保護者の皆さんにとって、N高の取り組みを知ること、高校選択の幅が広がることを願っています。奥平校長先生の熱意とN高の素晴らしさを感じていただけると嬉しいです。

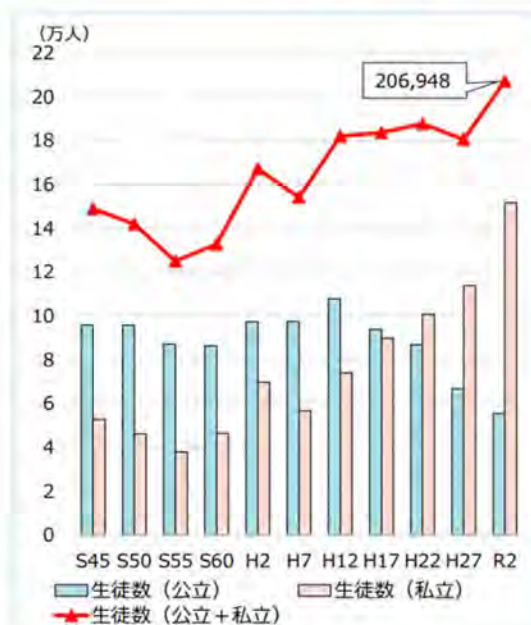
結びに、奥平博一校長先生に心から感謝申し上げます。

通信制教育の入学社の変化

通信制教育の入学者の特徴は、時代とともに変化してきました。以前の通信制教育の入学者は、主に全日制の学校に通うことが難しい事情を抱えた生徒が多かったです。全日制に適応しにくい不登校経験者はもちろんのこと、プロスポーツ選手や芸能活動を行う生徒にとっては、その特異なスケジュールに対応可能な通信制は非常に重要な選択肢となっていました。また、家庭の事情で通学が難しい生徒も多く、例えば家族の介護や家業の手伝いを必要とする生徒が通信制教育を選ぶことで、学業との両立を図っていました。さらに、高校を中退した後、再び学び直しを考える成人や、学歴の取得を目指す成人も通信制を通じて教育機会を得ることができました。

（文部科学省の資料より）

通信制高校の生徒数



しかし、最近では通信制教育の入学者層が多様化してきており、その特徴は以前とは異なる傾向を示しています。テクノロジーの発展とインターネットの普及によって、オンライン学習がより一般的になり、多くの生徒が通信制を選択肢として検討するようになりました。これにより、単なる「通学が困難な人々のための教育」から、むしろ「より柔軟で個別化された教育を求める人々のプラットフォーム」として位置づけられるようになっていきます。

現代の生徒たちは、自己のライフスタイルや学習スタイルに合った教育を求める傾向が強く、そのため、通学の時間や場所に縛られない通信制の利便性を評価しています。また、キャリア変更やスキルアップを目指す社会人が、時間の制約が少ない通信制を通じて学び直しを行うケースも増えていま

す。これに加え、特定の興味や専門に特化した補助として通信制を活用する生徒も多く、個々の興味やキャリアに特化した学習が可能になってきています。

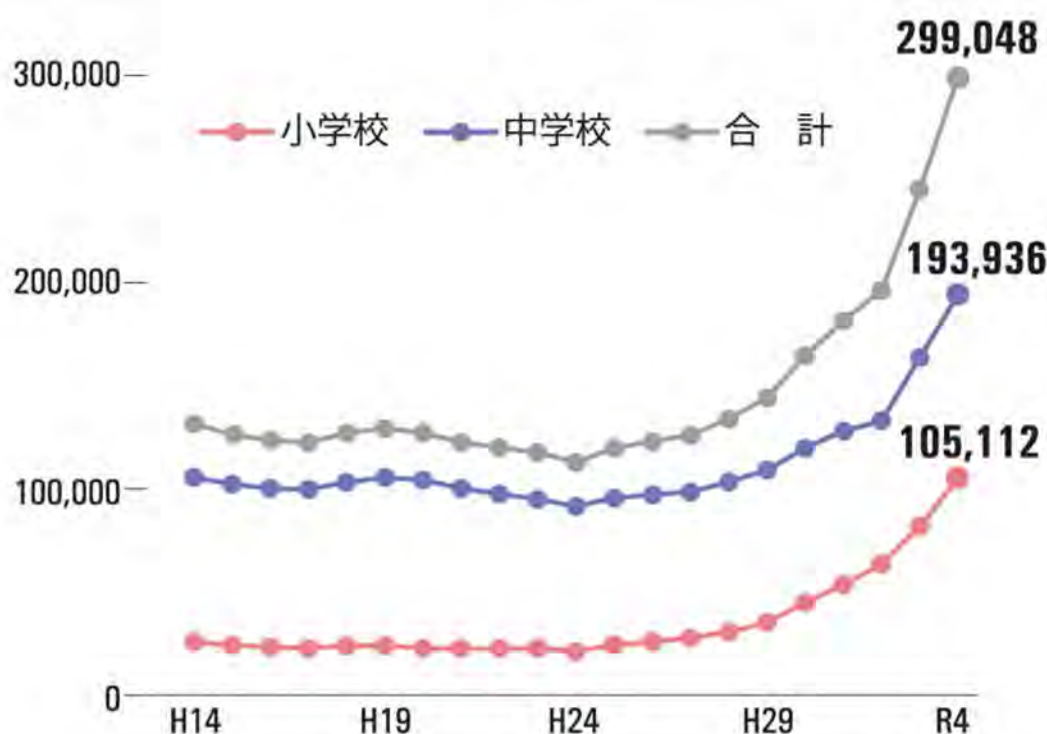
このように、通信制教育はその柔軟性と対応力を活かし、さまざまなバックグラウンドを持つ新たな生徒層に対して適応してきています。今後も通信制教育は、社会の変化や多様化する学習ニーズに応じてさらに進化していくことが期待されます。

急速に増えている不登校児童生徒

近年、不登校生徒が増加している背景には、学校での期待やプレッシャー、社会的な問題、そしてコロナ禍による精神的な負担が挙げられます。また、学校に行っても孤立感を感じる「形だけの登校」も問題視されています。政府の支援プログラムは改善されつつありますが、多くの生徒や家庭がその存在を知らず、支援にアクセスできていない現状も課題となっています。

（文部科学省の資料より）

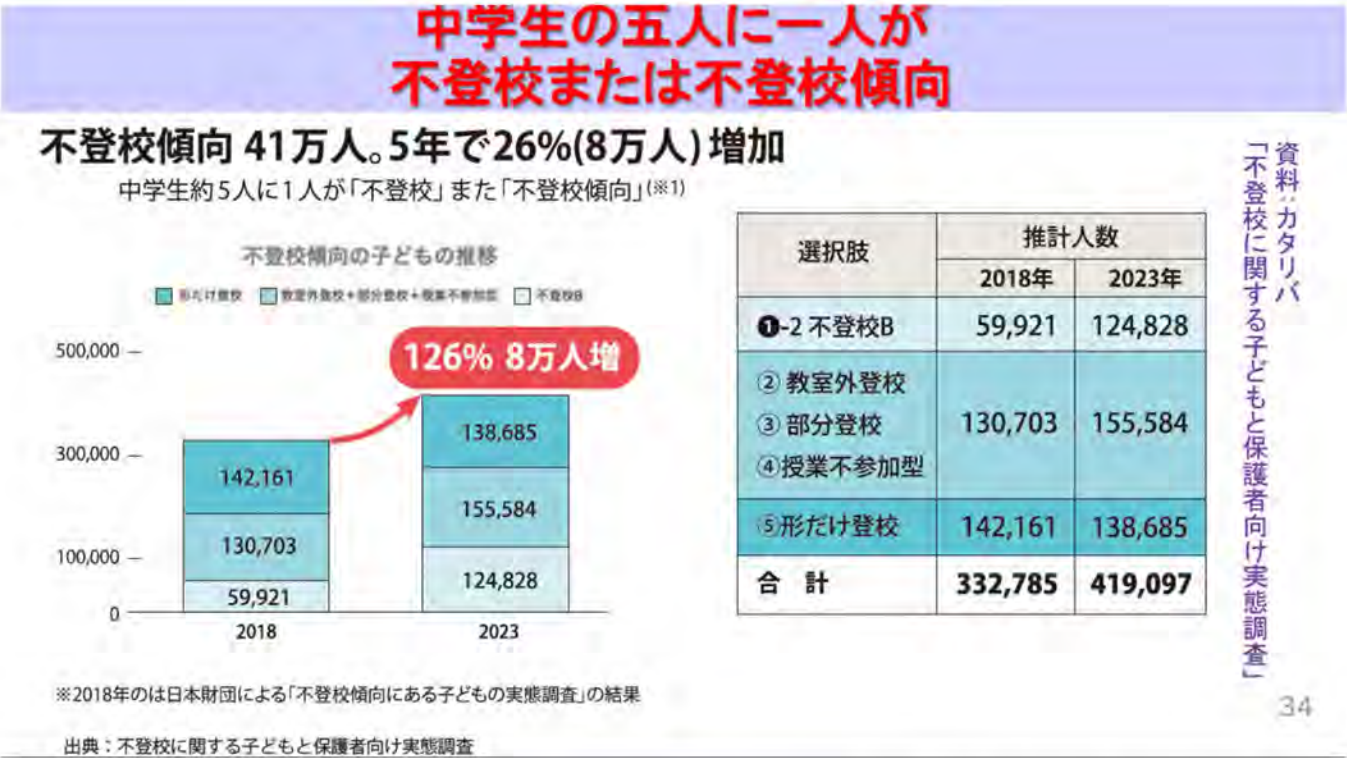
不登校児童生徒数の推移グラフ



令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について
令和5年10月4日（水）
文部科学省初等中等教育局児童生徒課

NPO カタリバによると不登校の児童生徒が急増している要因は、社会的・心理的な複雑な要素が絡み合っていることが背景にあるということです。

まず、学校での高い学業要求や人間関係のプレッシャーが一部の生徒に大きな負担となり、学校に通うことが難しくなっています。また、家庭環境や友人関係の中で孤立感を抱えるケースも多く見られます。さらに、近年ではコロナ禍が不登校増加に大きな影響を及ぼしました。コロナ禍での外出自粛やオンライン授業によるコミュニケーション不足が、児童生徒のメンタルヘルスに悪影響を与え、結果として学校に対する不安感や拒否感が強まりました。特に、小学校の低学年において、長期的な外出自粛により社会的なスキルが十分に発達せず、学校環境に適応しにくくなったケースが報告されています。



また、不登校の中には「形だけの登校」と呼ばれる、学校には通っているが心の面で適応できていない生徒も増えています。このような生徒は、表面的には登校しているものの、実際には教室内で孤立感を強く感じたり、ストレスを抱えている場合が多いです。学校内での孤立が、不登校に至る直接的な要因の一つとしても指摘されています。

通常登校より「形だけ登校」の子の方が幸福度が低い

「幸せである」と回答した子どもの約4割にとどまり、
通常登校の子どもとの差は33.8ポイント

「形だけ登校」の子は不登校とは認識されず、先生方も親も気付いていないことは多い。つまり、なんのサポートを受けていない。

■現在のあなたの幸せ度合いについてお答えください。

33.8ポイントの差

選択肢	通常登校	形だけ登校
幸せである	73.4%	39.6%
どちらともいえない	23.8%	43.1%
幸せでない	2.8%	17.3%
合計	100.0%	100.0%

n=通常登校 4792、形だけ登校 260

資料：カタリバ
「不登校に関する子どもと保護者向け実態調査」

出典：不登校に関する子どもと保護者向け実態調査

35

政府や自治体の支援プログラムは徐々に充実してきているものの、支援策が十分に浸透しておらず、必要な情報にアクセスできない家庭が多いことも課題です。特に、支援が必要な生徒や保護者が、適切なタイミングで支援を受けられないケースが存在し、問題を複雑化させています。

NPO カタリバ資料より

「不登校傾向」が5年間で8万人増。カタリバ独自調査と支援現場の声で考える不登校の課題とこれから <https://www.katariba.or.jp/magazine/article/report240125/>

不登校が増えている理由は？

私は、昔と違って今は不登校を言える環境ができてきたのだと思います。選択肢が増え、社会的に受け入れられるようになってきたことが大きいと感じます。

そういう意味で、多様な学びの方法がもっと受け入れられるべきだと思います。オンライン学習もその一環で、これからはもっと多様な学び方が求められるでしょう。
(N高・奥平校長)

33

コロナ禍で急速に普及し進化したオンライン教育

オンライン教育は、コロナ禍を経て学校教育において急速に普及し、その意義がより一層明確になっています。まず、オンライン教育は地理的な制約を取り払うことで、どこからでも教育を受けることを可能にしています。これは特に、遠隔地に住む生徒や健康上の理由で通学できない生徒にとって大きな利点です。さらに、オンライン教育では、さまざまな視覚的・聴覚的教材を利用できるため、学習スタイルに応じたコンテンツの提供が容易です。これにより、学習体験はより個別化され、各生徒のニーズにより適した教育が施されるようになっています。

また、オンライン学習の柔軟性は、生徒が自分のペースで学習を進めることを可能とし、時間管理の能力を向上させます。この柔軟性は、生徒たちに自律性を育むとともに、自己管理能力を高めるための良い機会を提供します。また、デジタルツールの活用により、現代社会で不可欠な技術リテラシーも高まり、これらのスキルは生徒たちの将来のキャリアにおいて価値あるものとなります。加えて、教材や講師へのアクセスがグローバルに広がることで、異文化理解や国際的な視野を持つことができる点も大きなメリットです。

このようにしてオンライン教育は、より包括的で魅力的な学習環境を提供し、従来の教室での授業と組み合わせることでさらに効果を発揮します。これからの教育は、社会の急速なデジタル化に対応した形態へと進化し、人々が多様な学びの機会にアクセスできる柔軟な学習スタイルを確立しつつあります。

以上、N高の取り組みを通じて通信制・オンライン教育を探究しました。

第5章 武蔵野東中・元校長（インクルーシブ教育）

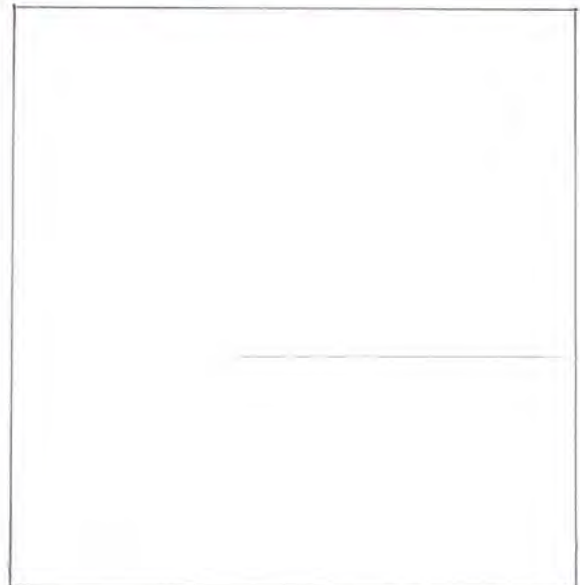
第5章 取材：武蔵野東中・元校長（インクルーシブ教育）では、インクルーシブ教育の先端校である武蔵野東中学校高等学校の菊地智恵子元校長（日本先進教育研究ラボ 主任研究員）にレポートしていただきました。

武蔵野東学園は、1964年に武蔵野東幼稚園として設立され、開園時に自閉症児を受け入れたことを契機に、「混合教育」と「生活療法」を始めました。これにより、健常児と自閉症児が分け隔てなく学び、自閉症児への教育成果が全国で注目されました。次第に入園希望が増え、卒園後の教育環境を改善するため、1977年に小学校、1983年に中学校、1986年に高等専修学校を設立しました。創立者の北原勝平と北原キヨの遺志を受け継ぎ、教職員はこれらの教育方針をさらに発展させ続けています。

創立以来40年 「混合教育(インクルーシブ教育)」実践校

自閉症児クラスは、入試やカリキュラムが健常児クラスとは異なりますが、学校生活全般が「混合教育」の場となっており、**すべての生徒はごく自然に関わりあっています。**

健常児クラスと自閉症児クラスとは、隣り合ったり向かい合ったりする教室配置になっているので交流しやすく、朝の登校時から挨拶をかわし、休み時間も廊下から声をかけあったりが日常の光景となっています。そして毎日の清掃や、お互いのクラスを行き来する形の交流給食などで、お互いを知る機会も作っています。



共生社会と「インクルーシブ教育」

日本先進教育研究ラボ 主任研究員 菊地 知恵子

1. 「インクルージョン」の理念

「インクルージョン」とは、国際社会が目指す基準として2015年の国連で採択された『持続可能な開発のための2030アジェンダ』に度重なり出てくる言葉である。言うまでもなく多様な背景をも

つ人々を「取り残すことなく」、あたりまえに生活できる共生社会の実現のため、その目標として「インクルージョン」を掲げている。人種、性別、民族や国籍、社会的な地位や貧富の差、そして障害の有無など多岐にわたる壁を乗り越える「理念」といいいいが、国の政治や宗教の違い、それぞれの成り立ちに根差す「違い」は尊重されるべきであり、現実的な諸問題の中で壁を乗り越えることは容易ではない。しかし『アジェンダ』には「大胆かつ変革的な手段をとることに決意している」とある。

この稿では、「違い」と「インクルージョン」をめぐる、特に障害のある子どもたちとの「インクルーシブ教育」の観点から、2030年をひとつの目標としてどのように共生社会への変革を実現していけるのか考えていきたい。

○「インクルーシブ教育」への潮流

「インクルーシブ教育」の言葉が使われることになったきっかけは、1994年の『サラマンカ宣言』である。それはスペインのサラマンカで開かれた「とりわけ特別なニーズを持つ子どもたちに役立つことを可能にさせるため」（「万人のための教育」）の会議における声明で、「障害をもつ人々の教育が不可欠」であり「通常の学校内にすべての子どもたちを受け入れるインクルーシブ教育の原則」をすべての政府に要求し勧告する、とある。

より具体化される段階が国連の『障害者の権利に関する条約』（2006年）で、その第24条には障害者が一般的な教育制度から排除されないこと、必要な「合理的配慮」が提供される「インクルーシブ教育システム」（an inclusive education system：包容する教育制度）のことなどが定められている。日本は2007年に署名、2014年に締結した。（注1）

『障害者の権利に関する条約』には、障害者の心身はそのまま尊重され、社会の側こそ意識を向上させるべきという、いわゆる「社会モデル」の考え方が反映されている。従来のあり方は、障害は個人が抱えるハンディキャップ・不自由さであり医療や福祉によってそれを解消する「医療モデル」とされる。「社会モデル」は障害を個人の問題ではなく社会問題としてとらえるゆえに、障害者に対する「合理的配慮」がなされるべきと、広く人権の面から捉えた考え方である。それに基づいたユニバーサルデザイン、施設や設備のバリアフリーは、今や誰もが知るものだ。すべての人が生きやすい社会へという考え方が、形として広まった例と言える。

ところで、『サラマンカ宣言』では障害児のほか、「英才児、ストリートチルドレンや労働している子ども」「遊牧民や辺境の子どもたち」など「学習が困難な子どもたち」すべてを対象としている。日本なら外国籍の子どもたちや身体と心の性自認が異なる子どもたち、ヤングケアラーの子どもたちも含むことになるだろう。また今、何らかの理由で不登校になっている子どもたちの問題も看過できない。そして『サラマンカ宣言』は、障害により特別なニーズをもつ子どもたちの「インクルーシブ教育」について以下のように述べている。

- ・「インクルーシブ校内で必要とされる特別な支援を受けなければならない」
- ・「通常のものとは異なったカリキュラムによってではなくて、通常のカリキュラムの枠内で付加的な指導上の支援を受けるべきである。」
- ・「特別な教育的ニーズをもつ子どもたちに対して、通常の学校内での最小限の助力から、必要であるならば、専門的教師や外部の支援スタッフからの援助提供へと学校内や校外に広がる付加的学習支援計画にまたがる、さまざまな支援が提供されるべきである」

今年は『サラマンカ宣言』から30年、『障害者の権利に関する条約』締結から10年となる。日本の「インクルーシブ教育」はどのように進んでいったのか、まずそれに触れていく。

○日本の「インクルーシブ教育システム」

文部科学省では『障害者の権利に関する条約』に先立つ2003年に『今後の特別支援教育の在り方について 最終報告』の答申が出ている。その内容は近年増加する特殊教育諸学校（盲・聾・養護学校）や特殊学級への在籍者や、通常の学級にてLD、ADHDの子どもへの指導が行われていることを受けて、新たな体制・システムの構築を図ることが必要という認識のもと、特別な場で指導を行う「特殊教育」から児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じて適切な教育的支援を行う「特別支援教育」への転換を図ることである。

その後、2012年に『共生社会に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）』が出された。（のちに述べる場合には略して『報告・2012』とする）この報告では冒頭の「共生社会の形成に向けて」の部分で、「インクルーシブ教育システム」の構築について、以下のように記している。

- ・障害の有無にかかわらず子どもたちが学校内の「同じ場で学ぶことを追求するとともに、個別の教育的ニーズ」に対して「自立と社会参加を見据えて」「多様で柔軟な仕組みを整備することが重要である。」「小中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある「多様な学びの場」を用意しておくことが必要」
- ・「特別支援教育は、共生社会の形成に向けて、インクルーシブ教育システムの構築のために必要不可欠なものである。」
- ・特別支援教育を率先して進めていくことがインクルーシブな社会の構築につながる。
- ・短期的には、就学相談・就学先決定の制度改革、教職員の研修の充実、当面必要な環境整備の実施。
- ・中・長期的には、短期目標の進捗を踏まえた方策の検討、最終的には、条約の理念が目指す共生社会の形成に向けてインクルーシブ教育システムを構築していく。

このように、日本の「インクルーシブ教育システム」では、「インクルージョン」の理念に理解を示しつつ、今の目標として「特別支援教育」の整備を重視している。学びの場の形としては通常の学

級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった「分離型」である。2013年の学校教育法施行令の一部改正により、小・中学校の学びの場については本人・保護者の意向を可能な限り尊重しながら、教育委員会が最終判断を行うものとなった。「同じ場」を追求しつつも「分離型」であることについては、先の『報告・2012』には現状の課題として以下の記述がある。

・すべての子どもを対して同じ場での教育を行おうとすることは、同じ場で学ぶという意味では平等ではあるが、実際に学習活動に参加できていなければ、子どもには、健全な発達や適切な教育のための機会を平等に与えることにはならず、そのことが、将来、その子どもが社会参加することを難しくする可能性がある。

日本は、障害のある子どもの将来の社会参加を見据えて、子ども自身が確実に力を付けられる場での学びを推進するために、障害に対応した専門教育を維持していく立場をとっている。先の『サラマンカ宣言』からの流れで言えば、「分離型」で進めることは逆行ととらえられ、2022年の国連での『障害者の権利に関する条約』の中間審査では、日本に対して「インクルーシブ教育の権利を保障すべき」という厳しい勧告が出された。（注2）

○新しい時代への試み

その後2021年に、『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して』が答申された。その内容で「インクルーシブ教育システム」の構築に関連しているのは以下の項目である。

- ・「個別最適の学びと協働的な学びが一体的に充実される」
- ・「障害のある子供とない子どもが可能な限りともに教育を受けられる条件整備」

令和の教育改革とも称される2023年にかけて発表された諸会議の報告（注3）をもとに、「インクルーシブ教育システム」への具体的な方策が進められる。学校における合理的配慮、就学相談の体制、情緒障害を持つ子どもへの通級による指導や支援教育に関わるコーディネーターの役割の充実などである。

そして諸会議の報告のうち、『通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への支援の在り方に関する検討会議 報告』（2023年）に「インクルーシブな学校運営モデルの創設」が提言された。特別支援学校と小中高等学校のいずれかを一体的に運営するというものだ。2013年からモデル事業として、支援学級と通常の学級との「交流」および「共同学習」型の事業が行われており、2024年には「インクルーシブな学校運営モデル事業」予算のもとで一体運営を試みる事業が展開されている。

2. インクルーシブ教育

○ 曖昧さへの懸念

ここからは、筆者個人の考えを述べていくことにする。筆者は「インクルーシブ教育」を推進する考えを持ち、今後の本格的な流れの中で、本質的な議論がなされることを願っているものだ。しかし今すぐ、国連の勧告にある「分離された特別教育をやめる」ことや「フル・インクルージョン」を進める考えには、そのまま賛同するものではない。世界各国で様々な模索があるように日本にも独自の進め方があり、しかし「インクルージョン」の理念に沿って柔軟な変革が必要な時期に来ていることも切に感じている。「インクルーシブ教育」の実現は法的な整備や予算措置が前提となるが、ここでは教育の中身にしばって述べていくことにする。

最初に今の懸念として、「インクルーシブ教育」についての誤解や、理解の曖昧さがあることを感じている。筆者が聞いた或る教員の言葉を挙げてみる。「インクルーシブ教育は通常の学級の子どものお世話度合に頼って成り立つ」と言う。全体の動きについていけない障害のある子どもが通常の学級で過ごせるかどうかは、クラスの友だちがどれだけ助けてあげられるかということにかかっているのだという。「小学校の低学年なら親切な女子がいるからいい。でも中学校になると皆忙しくなって、助けてくれる友だちがいないとインクルーシブは難しい」と。これには衝撃をうけた。この「インクルーシブ」では形の上での「インクルーシブ」を果たしただけで、本質的な意味を失っている。「インクルーシブ教育」は、すべての子どもが対等に、貴重な学びを得るべきものである。

また障害のある子どもにとっての「特別な教育的ニーズ」を満たすことも重要であり、活動に参加できない状況であれば「将来の社会参加を難しくする可能性がある」（『報告・2012』）という懸念の通りとなってしまう。今は試みの途上であっても、示唆に富む大事な時期でもある。「インクルージョン」の理念の理解が正しく進むことが第一だ。「インクルーシブ教育」は、未来の共生社会を実現するための本質的な要素であるので、少なくとも「形だけインクルージョン」が先行し、理念に逆行してしまうような運用は避けたい。そして教育の中身を問うことから、本質的な議論に進めていくことだと考えている。

○ 学びの相乗効果

教育の中身として考えたいのは、当然のことながら教育の質を高めることを基本とすることだ。学校教育を受ける期間は短いながらも、人生のうちで人格が形成される最も貴重な時である。子どもたちの自立と将来の社会参加のため、できれば生涯にわたって学ぶ力をつけることが望まれる。

特に障害のある子どもには将来のライフステージや家族との生活までを徐々に見通していけるようになる教育が望ましい。よって同じ場で学ぶことを目指しながらも、障害のある子どもの早期教育において「特別支援教育」という質の高い専門教育を重視すべきことは確かである。また教育全般において、学力のほかに将来必要となる技能を身につけることを基本としながらも、豊かな感性を育み、自分で価値観を磨いていこうとする人間へと、そして考えて行動できる人間へと成長させる教育であ

ることを重視したい。ほかにも、学びが困難な事情を持つ子どもや外国籍の子どもなどへの適切な学びなど多様な専門性を含めていく必要がある。障害のある子どもとの、という部分が協調されるが、「インクルーシブ教育」ではすべての子どもにとって質の高い教育がなされ、それぞれの子どもに学びの相乗効果が生まれ、やがて共生社会への新しい価値観が作りだされていくのである。

○「インクルーシブ教育」の教育技術

教育内容には教育技術も付随する。ここでは子どもたちの心をどう成長させていくかという教育内容と、年齢的な段階にそった教育技術を述べていくことにする。

幼児期に、幼稚園や保育園で障害のある子どもを受け入れて、同じ環境で過ごすことには教育的効果がある。生活をするということが主になるので、大人が万全の配慮をすれば進めやすい。見えやすい障害に対しては人的・物的な配慮が加えられる必要がある。ただし見えにくい障害、いわゆる情緒障害と言われる「特性」を持つ子どももあり、それがはっきりとしない年齢でもある。保育者は、まず障害の有無にかかわらず、主体となる子どもを知り、それぞれの子どもの「違い」を把握することを指導の出発点としているはずであるから、「違い」や「特性」を持つ子どもを把握した上で、個々の「特別な教育的ニーズ」に対する支援を加えていくことになる。個別の声掛けや対応といった方法で、集団における教育効果をあげていく。障害を持たない子どもたちは、保育者による適切な支援がなされている環境下であれば、自分と違う個性との折り合いをつけて生活をするを受け入れていく。自然な関係性を得ることのできる「インクルージョン」の初歩的段階である。

そして小学校以上になれば、子どもたちは自意識を高めていく年齢になる。自分がどのようにふるまえば他者に受け入れられるのか、他者をどう理解して受け入れるかを考えて行動するようになる。このあたりから「インクルーシブ教育」の正念場になる。元来、子どもというのは自分中心的なものだ。子ども同士は対等にぶつかりあって、良いことも良くないことも学びあえる関係であるべきだ。「友だちが困っているから手を貸そう」「出来ないから手伝ってほしい」、これはどの子どもにとってもあることだから、よいだろう。しかしもし、この章の初めに挙げたような「お世話をする・される」関係を大人が求めてしまうと、対等な関係ではなくなってしまう。常に助けの手が必要ならそれには責任が伴うので、教員や介助者が担う。「フル・インクルージョン」を進める考えについては、それが無理なく誰もが楽しめる場面なら成立するだろうが、しかし最初から「インクルージョン」であることを目的とすると、システムに押し込めるような無理さ、対等な関係を崩すことが生じてしまう。

「通常のものとは異なったカリキュラムによってではなくて、通常のカリキュラムの枠内で付加的な指導上の支援を受ける」（『サラムンカ宣言』）とあるように、どの子どもにも幅広いカリキュラムからの選択の機会が設けられることは望ましいし、他方で「特別な教育的ニーズ」を満たすことも欠かせない。今の日本の「インクルーシブ教育システム」でも、教科カリキュラムの内容に関して、人的・物的な支援が加わることで共に学ぶ場面が実現できることもあるだろう。しかし筆者はより自然な「インクルージョン」の場面は、学習指導要領が示す「カリキュラム」内には収まりきらないと考えている。普通の社会を想定すれば、学校での生活の場面がもっとも学びに適した機会となる。日本

の学校には、学習カリキュラム以外にも、特別活動ほか柔軟に、子どもが共に生活する場としての活動を設定しやすく、それらが生きた「インクルーシブ教育」の場になっていける。

少し具体的に述べることにする。学年やクラス単位、または小グループでの活動が学習時間割以外に計画されているなら、そこには年間・週・日常単位で「インクルーシブ教育」が実践できる場面を意図的に頻繁に計画しておく。ホームルームクラスなどは、子どもにとって学校の基本的な居場所だ。これは幼稚園や保育園で生活を共にすることと似ている。日常の活動や行事、校外活動などはあたりまえの学校生活であり、そこでは何かを共に作り上げる目的で共通の経験をし、感情を共有することができる。子どもは、それぞれの「違い」に直面して、「違い」を理解した上で何かを成し遂げなければならないことや、そのためには双方の努力が必要だということに気づく。ここで、いろいろな出来事が起きるのだが、教員は子どもが前向きにとらえ、楽しさや達成感を得て、双方にとって必要な学びの経験になることを想定して進めていく。

決して成り行きに任せるのではなく、先を見越した周到な準備が必須である。同等の経験値を得るためには、子どもの力量と関係性を予測しなければならない。子どもの関係性を予測したグループの編成、グループ替えのタイミングと頻度、グループの力量を考慮した課題設定などは基本となる。障害の特性によっての配慮も必要だ。対等な関係として進まないことが予測されれば、障害のある子どもと障害のない子どもとの人数比を、1対1ではなく1対2や1対3の割合にすることも考える。実際の場合では適切な関係になるよう活動を見守りつつ、望ましくない関係が生じた時には教員が前面に出る。子ども同士ではまだうまくつきあえない時には助言を加える。失敗やいさかいが起きた時にどうフォローしていけるかは、教員の常時からの子どもの観察からできることである。当然のこととして、「インクルージョン」の場での双方の関係性において障害のある子どもは「おきゃくさま」ではありえない。人とつきあう力をつけるために指導するのはどの子どもに対しても同じである。

すでに今の小・中学校で「交流」や「共同学習」という名称で実施されている活動があれば、それを「インクルージョン」へと前進させていくために、「交流」「共同学習」とつけずに活動を表す名称に変えていったらどうか。一緒にやることがあたりまえになれば、「交流」という言葉は要らなくなる。同じ場で共通の経験をし、自然な人づきあいができていて、あとで振り返れば貴重な関係づくりになっていたことに気がつく。いや子どもは気がつかなくてもいいのだ。それがあたりまえになれば気がつくこともない、それが理想である。

○子どもは子どもから学ぶ

子どもたちの心には「インクルーシブ教育」はどう映っていくだろうか。先に、友だち同士とは対等にぶつかりあって、良いことも良くないことも学び合える関係であるべきと述べた。子どもは子どもから学ぶのである。「違い」があっても共に学びあうことができ、何かを成し遂げた楽しい経験にすることが、「インクルーシブ教育」において何よりも大切になる。友だちの存在は自分にとって大事になり、自分も大事な存在になりたいと思う。いさかいや失敗があっても、それはお互いに乗り越えることだと学ぶ。うまく関係性を築けずに嫌な思いをすることもあるが、その経験に意味を見出すのが、ずっと後のことであってもいい。「インクルーシブ教育」は子どもにとって理屈ではない。友

だちを理解して共に何かを成し、一緒に成長したことが感覚としてわかる。それは障害のある子どもにとっても、障害のない子どもにとっても、である。そのかけがえのない関係性は、互いに学んだ結果として得るものなのである。

中学生の後半から高校生以上になれば、世の中のことが相当わかってくる。子ども時代とは違って、障害のことを知識として頭で理解する時も訪れる。少し大人の感覚になって、双方がつきあう時代に入っていく。やがて自分が経験してきた「インクルーシブ教育」の観点から、世の中の「インクルージョン」がどうなっているかを評価するだろう。自分は社会でどうふるまっていこうか、どう生きていこうかと考える。障害のある子どもと、障害のない子どもにとって、社会への出口が違うことがある。その時、「インクルーシブ教育」によって、すべての人が生きやすい世であることを願う子どもに育ったなら、やがて社会は変わっていく。学校での楽しくも貴重な経験から、大事な友だち同士が対等に生きる社会でありたいと、大人になって訴える側に立てるからである。

子どもたちはいつまでも受動的な立場ではない。小学生であっても、自分がどうふるまったらいいかと迷うときに手本にするのは教員や親である。教員や親がどう考えているか、どう接しているかを自然に学び、そこから能動的に行動しようとするだろう。障害のない子どもが町で障害のある人に出会ったら、迷うことなく自然に手を貸すかもしれない。障害のある子どもが町で困ったことがあったら、近くににいる人に手伝ってくださいと言うことができるかもしれない。実践の場は学校の場にとどまらない。

○教員の資質

さらに「インクルーシブ教育」の大事な要素、教員のあり方についてである。実践には学校と教員にはかなりの力量が求められる。教員たちには、子どもの個性の理解と直近の情報は必須である。学校や学年で、常に子どもたちについての情報交換がどの程度できているかは学校としての力量である。というのは、「インクルーシブ教育」では、「何の活動をする」という活動成果や「共に活動する」という目的の達成よりも「インクルージョン」している時に起こるあらゆることに対して教育効果をあげていくことが大切だからである。だからあらかじめ教育効果を設定しておいても、その場で起きたことに対応できるだけの力量を教員が備えていることが必要なのである。人間関係や感情は、あとからの修正は難しい。子ども同士で起きることをきちんと見届け、即時に必要な対応をする。また時には教員が干渉せずに子ども同士に任せていくのがよいこともある。これらは教員の個人プレーではなく、学校内の教員たちの普段からの情報交換、考えのすりあわせから生まれていくもので、要は教員のチームワークである。

小学校や中学校の同じ学校内の通常の学級と特別支援学級であれば、共に活動できるものも多いだろう。また今のところは敷地を別にしていない特別支援学校との連携であれば、場の設定はより慎重になり、相互の教員や専門スタッフとの連携も欠かせない。教員にはどの子どもにも適切な指導ができるだけの幅広い専門性があることが望ましく、それには通常の学級の指導も支援学級または支援学校の指導も経験していれば理想的なのだが、ただ現実的には問題がある。令和の教育改革の会議の中で

は、教員が10年目までの期間内で特別支援教育を複数年経験することが提案されているが、現実的にはかなり難しいと受け止められている。また教員免許のこともある。「インクルーシブ教育」の推進においては文部科学省の資料には「（小中高等学校と特別支援学校の間の）柔軟な教育課程・指導体制」という文字もあり、今後どう進むのかは注目される。

せめて同じ敷地内にて顔を合わせる環境が設定できるなら学校生活の場面でいろいろな子どもを知り、声をかけていけるようになるのではないか。それだけでも従来とは違う。そしてたとえ経験年数の浅い教員であっても子どもから学ぶことができる柔軟な考えを持つ教員であることが望ましい。ただし経験豊かな教員たちのチームの中にいることと、信頼を寄せてくれる保護者たちの存在、保護者との信頼関係を築いていける学校体制であることが大事である。

「インクルーシブ教育」の大事な要素 教員のあり方について

「インクルーシブ教育」実践には**学校と教員にはかなりの力量**が求められる。

教員たちには、**子どもの個性の理解と直近の情報は必須**である。

学校や学年で、常に子どもたちについての情報交換がどの程度できているかは学校としての力量である。というのは、「インクルーシブ教育」では、「何の活動をする」という活動成果や「共に活動する」という目的の達成よりも**「インクルージョン」している時に起こるあらゆることに対して教育効果をあげていくことが大切**だからである。だからあらかじめ教育効果を設定しておいても、その場で起きたことに対応できるだけの力量を教員が備えていることが必要なのである。人間関係や感情は、あとからの修正は難しい。子ども同士で起きることをきちんと見届け、即時に必要な対応をする。

また時には教員が干渉せずに子ども同士に任せていくのがよいこともある。これらは教員の個人プレーではなく、学校内の教員たちの普段からの情報交換、考えのすりあわせから生まれていくもので、要は**教員のチームワーク**である。

48

3. 共生社会に向けて

○「自分らしく」いられない子どもたち

子どもをとりまく現在の状況から展望していきたい。今、日本の子どもたちをとりまく状況を見るに、残念ながら幸福度はあまり高くなさそうだ。ユニセフの『子どもの幸福度調査』（2020年）では、38か国中総合で20位である。国連の『世界幸福度ランキング』（2024年）でも、日本は51位、年代別では60歳以上が36位、30歳未満が73位。暗い話題を挙げってしまったが、少子高齢化社会を迎えた日本は、課題先進国である。経済的にはまだ比較的豊かではあるが、精神的な幸福は感じにくいようだ。

子どもをとりまいて、今2つの大きな問題が顕在化している。「不登校」、そして「若者の自殺者数」が下がらないことである。2022年の調査結果では、「不登校」は29万9048人（小学校10万5112人、中学校19万3936人）で、全体に対する割合は3.2%（小学校1.7%、中学校6.0%）で前年度から増加している。要因のトップは「無気力・不安」51.8%。「若者の自殺者数」は、2023年は高校生347人、中学生153人、小学生13人、計513人で1980年以降過去最多となった。これらの数字を見れば、若年層の心が安定しているとは言い難い。

子どもの抱く「無気力・不安」、それは心の不安定さ、子どもが「自分らしく」いられないことを示す。最近では自己肯定感という言葉をよく聞くが、自己肯定感という言葉には、基本的にプラスである（肯定する）ことを求められるようなニュアンスがあるので、自分が自分そのままマイナスに感じる部分も含めて尊重されることとは少し違うように感じる。

人は誰にも「違い」があり、「違い」に優劣はない。競争はつきものだし、競争は必要だ。ただ、無為な争いに発展しないための暗黙の限度や、敗者になった側への良識ある態度などが社会のルールとしてなければ、すさんでしまう。世の中は強い者も弱い者もなく「共存」「共生」が前提なのだ。世界を見ても、グローバル社会で「共存」「共生」を考えられなければ共倒れになるだけだ。子どもの心には大人社会の不安が反映されている。「不登校」についてはこの稿では深く触れないが、子どもの本来の健全さを取り戻すために、家庭のあり方は大きいだろう。少なくとも学校において、子どもが無条件で認められ「自分らしく」いられるなら、学校は安心できる居場所になる。学校はすべての子どもが安心できる場所でなければならない。

「インクルーシブ教育」の最終地点は、それぞれに「違い」を持つすべての人が、互いの「違い」を理解して認めあう「インクルージョン」の理念を感覚として身につけることである。誰一人同じ人はいないのであるから、どの子どもも、自分は自分そのまま尊重されるのだと知ることができる。

「自分らしく」あることを受け入れられる安心感。学校での小さな「インクルージョン」社会が実現すれば、ユニバーサルデザインやバリアフリーがあたりまえになったように、子どもたちが社会に出た時には大きな変革の核になるかもしれない。

○共生社会へのキーワード

まとめとして共生社会に向けての変革、そのキーワードを考えてみる。一つ目は小さなコミュニティ、二つ目は他者の理解と尊重に向けての想像力である。

まずコミュニティだが、地方での地縁にもとづく濃い人間関係の社会と都市部での希薄な人間関係の社会では、だいぶ様子は違うだろう。従来からの地方のコミュニティも時代とともに変わる必要があるとして、現代の社会で人が不安感を抱きやすい都市部での生活も、コミュニティのあり方が、社会を変えるきっかけになるのではないかと。近隣とのつきあいは希薄であっても、人は職場や趣味の集まり、習い事など、なんらかの小さなコミュニティには属している。そのコミュニティの中で人は実際の・具体的な役割を持つが、同時にその人のキャラクターから生じる「名もない役割」のようなものがある。それが良い方に働く時もあればそうではない時もあるだろうが、他者との関わりで自分が必要とされる、役に立っていることを感じたり、何をせずとも居ることを認められたりすることは心が満

たされることに違いない。「自分が必要とされている」と感じられる関係性ができるのは、「誰も取り残さない」ことに等しいのではないか。これからは小さなコミュニティに目を向けて大事にするべきであるし、そのコミュニティが孤立しがちな人、障害のある人、外国籍の人、ほかにも様々な人にとっての安心できる居場所になること（「インクルージョン」）が必要だ。

こういったコミュニティの構築とともに、実際的な関係性として他者への想像力がはたらく社会でなければならない。常日頃、SNS などをはじめとして発信され享受される情報は瞬時に消費され、共感も批判も匿名で可能だ。現代の人は他者とかかわりを求めるも、深いかかわりになることを避けてもいるように見える。さまざまな価値観がある中ではあるが、立ち止まって他者への想像力を巡らせることをおこたらないようにしたい。コミュニティをはじめとして自分の回りの他者に想像力を持ち、対等な関係性を築こうとすることは、共生社会への出発点となるだろう。

○ひとつのコミュニティとしての「インクルーシブ校」

筆者は地域の「インクルーシブ校」が、ひとつの小さなコミュニティとなり新たな風を起こすことを期待している。そこで最後に、架空ではあるが「インクルーシブ校」と地域のコミュニティについて述べていくことにする。

地域に規模の小さな「インクルーシブ校」を設置する。通常の学級を基本として、特別支援学級や特別支援学校をどのように組み合わせるかは、校地や施設、人的・物的な条件整備によるので、その地域で可能なものを考える。地域の子どもが普通に通って来られる範囲での学校が望ましい。「インクルーシブ校」の形態は、学校生活の場は共通であり、学ぶ内容は個別のニーズに合わせて分かれる。特別なニーズに合わせた教育は、通常のカリキュラムの範囲にはとても収まらない。個に合わせて教育内容の「違い」はあって当然なので、「インクルーシブ校」では柔軟な運用が認められると良い。いったん決めた「インクルーシブ教育」の形態が、将来にどう発展していてもいいのだが、まずは学校の中に、通常のカリキュラムを進めるグループと、障害などに応じた特別のニーズに合わせた専門教育を進める複数のグループがあることになる。通常の学習カリキュラム以外に、共に取り組む活動の内容がきちんと計画されていれば、互いに学びあう機会は充実する。教員も専門性を持ちながら連携する。特に特別支援教育に関わる専門性の高い分野は重要である。子どもの健康と安全のための専門的な支援も必要とされる。学校の規模は大きくなくとも、多くのニーズに合わせるので教員や専門スタッフの数は必要となる。日々教員が入れ替わるよりも、子どもの情報を継続的に知っておくためにはなるべく安定した職員態勢であることが望ましい。カリキュラムは、すべての子どもにとって、そして特に障害などに応じた特別のニーズをもつ子どもたちに対しては、社会に出ていくに近い年齢になるにつれ、社会で必要とされる力をつけることを重視する。この学校に学ぶ子どもたちは、それぞれが「違い」を認め合って学び合う。他者への想像力を持つことを、理屈ではなく感覚として身につけて育っていくのである。

この「インクルーシブ校」は、障害のある子どもと障害のない子どもがごく普通に過ごすひとつの共生社会のコミュニティである。保護者をはじめとして子どもたちに接する大人たち、たとえば通学路周辺に居る大人たちが理解者になれば、学校を中心としたコミュニティは広がっていく。更に行事

やイベントを通して学校外でのつながりを持てば「共生」の場は広がる。理想としては、障害のある子どもの将来の就労先が地域の中にあり、生涯にわたってその地域で暮らしていけることだ。

2023年6月に決定した「第4次教育基本計画」には、2040年までのコンセプトとして「持続可能な社会の創り手の育成」、そして基本的な方針の中に「共生社会の実現に向けた教育の推進」や「持続可能な地域コミュニティ」の文言がある。ある地域での「インクルーシブ校」から、学校を含む地域が理念を同じくするコミュニティに成長していくことを理想として述べてみた。

子どもは子どもから学ぶ

友だち同士とは対等にぶつかりあって、良いことも良くないことも学び合える関係であるべき。**子どもは子どもから学ぶ**のである。

「違い」があっても共に学びあうことができ、何かを成し遂げた楽しい経験にすることが、「インクルーシブ教育」において何よりも大切になる。

友だちの存在は自分にとって大事になり、自分も大事な存在になりたいと思う。いさかいや失敗があっても、それはお互いに乗り越えることだと学ぶ。うまく関係性を築けずに嫌な思いをすることもあるが、その経験に意味を見出すのが、ずっと後のことであってもいい。

「インクルーシブ教育」は子どもにとって理屈ではない。

友だちを理解して共に何かを成し、一緒に成長したことが感覚としてわかる。それは障害のある子どもにとっても、障害のない子どもにとっても、である。そのかけがえのない関係性は、互いに学んだ結果として得るものなのである。

47

〇結びにかえて

「誰が『普通』を決めているのか？」

この言葉は、ある男子中学生の卒業文集の一節である。彼は通常の学級で小学校時代を送り、中学校になって初めて自閉症という障害をもつ多くの友だちと学校で過ごすことになった。初めは自閉症の友だちの異様な振る舞いに戸惑うのだが、共に過ごすうちに友だちのことが分かってくる。今まで自分が障害という言葉だけで人を見ていたこと、友だちが自分と違うこと、それどころか自分にはない素直さや得意なものをもっていることを知る。その時から彼の、障害を持つ友だちとの学校生活が変わった。3年間の中学校生活を終えて卒業する時に、彼は思った。「普通」って何だろう。障害のある友だちは僕にとって「普通」の友だちだった。でも障害があることで偏見を持つ人が世の中にいる。誰が「普通」を決めているのか。僕はこれから生きていくうえで勝手に他のイメージを決めたりしない。集団の中で操作されないしっかりとした価値観を持った人になりたい。そう思えるのは中学校生活での、自閉症の友だちとの経験のおかげだ。

この生徒は、障害を「たいへんだ」、「かわいそう」でも、「多様性を認める」でもなく、ただ友だちになることから、自分の人生にとって真実となることを教えてもらった。子どもにとって、教育のシステムや理念など理屈で知ることはまず関係ない。経験によって、これからの人生を生きていくときに自分のあたりまえになる価値観を形成していく。

「インクルーシブ教育」の実現のためには解決すべきことは多いが、「理想に過ぎない」と言ってしまうとそこまでである。理想を持たずしては何も変わらない。お互いさまという昔からの言葉があるが、これからはさまざまな人との「共存」をしていかなければ自分の存在も成り立たないのだ。障害に限らず、人種、性別、民族や国籍など、いろいろな「違い」を理解しながら「共存」する共生社会への試みは、それぞれが「自分らしく」生きるための方策でもある。この稿では「インクルーシブ教育」の観点から共生社会への変革を考えていったが、子どもたちにとって心豊かな未来社会がおとずれることを切に望んで結びとする。

（注1）『障害者の権利に関する条約』への署名(2007年)後に国内法を整備。2011年『障害者基本法』、2012年『障害者総合支援法』、2013年『障害者差別解消法』、また『障害者雇用促進法』を改訂。

（注2）「強く要請する事項」として6点、その中には「分離された特別教育をやめるための国家行動計画を採用すること」や「障害のある子どもの通常の学校への在籍を拒否することを許さないために特別支援学級に関する通知を撤回する」ことが含まれる。

（注3）

『新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議 報告』（2021年）

『特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議 報告』（2022年）

『通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への支援の在り方に関する検討会議 報告』（2023年）

また厚生労働省関連で『医療ケア児及びその家族に対する支援に関する法律』（2021年）

（参考資料）武蔵野東中学校コード（共生社会に向けた新たな価値観の創造）

武蔵野東中学校コード（共生社会に向けた新たな価値観の創造）

●思春期の自立と15歳のチャレンジスピリット

●共生社会に向けてのリーダーシップ

学びの本質への気づきと進路の実現		協働とコミュニティの形成	共生社会の創造	
- 知識がつながる教科横断型授業 「探究科」の掘り下げと「生命科」での気づき		- 学びあい、高めあう環境 - 主眼主体でつくる学校生活	「共生教育」の経験からの実践	
3 協働と自立	品性を備えた人格として学びの本質にいたる - 受験を通して進路を実現、将来観を持つ - 検証と批判によりものごとの本質を抽出 - 自己実現のために必要な学びへ	協働と発信 - 目標を聞きあひ - 生徒会活動の科付、リーダーシップの育成 - 自らの経験にとらわれない創意	共生社会に向けた新たな価値観の創造 「ボランティア活動の問いと答え」 「授業する」と 「読む」と、読解力を高める	自己の人生と社会への挑戦と変容
2 多様性と内面化	ものごとの本質の探究と自己の確立 - 思考力の伸長と必要なスキルの獲得 - 訴求力のある表現力 - 自己を知り、内面を掘り下げる - 自己存在感、自己肯定力の素地	他者理解と学びあい - 行事や学校生活での他者理解 「対話」による創造 - 他者の成長への意欲	学内コミュニティからの活用 - 学内コミュニティの共有化 - 行動力 - 他者他事を見守りあひあひする（ニューズ、リポート等） - 学習や疑問を問うあひあひ	試行錯誤と克服
1 主体性と自律	知る・感じるを基本に 自ら伸びる力をつける - 自学自習と計画性の確立（「宿題の出ない進学校」） - 探究型の学び（『探究科』）と人間教育（『生命科』） - 多様な経験（行事、全教科の充実）	人とつながり、違いに気づく - 一人ひとりの違いを知る（課外が得意な者、不慣れなコミュニケーション） - 互いの行事参加	社会・世界に視野を広げ、価値観を知る 「生命科」「探究科」の学びあひの共有化 - 社会・世界の広大な価値観 - 異文化理解の関わり	視野の広がり
A 自分への気づき		B 他者への気づき	C 社会・世界への気づき	
主張と探究・感性		学びあい・対話	検証・批判・創造	

（拡大版A）

学びの本質への気づきと進路の実現		
- 知識がつながる教科横断型授業 「探究科」の掘り下げと「生命科」での気づき		
3 協働と自立	品性を備えた人格として学びの本質にいたる - 受験を通して進路を実現、将来観を持つ - 検証と批判によりものごとの本質を抽出 - 自己実現のために必要な学びへ	自己の人生と社会への挑戦と変容
2 多様性と内面化	ものごとの本質の探究と自己の確立 - 思考力の伸長と必要なスキルの獲得 - 訴求力のある表現力 - 自己を知り、内面を掘り下げる - 自己存在感、自己肯定力の素地	試行錯誤と克服
1 主体性と自律	知る・感じるを基本に 自ら伸びる力をつける - 自学自習と計画性の確立（「宿題の出ない進学校」） - 探究型の学び（『探究科』）と人間教育（『生命科』） - 多様な経験（行事、全教科の充実）	視野の広がり
A 自分への気づき		
主張と探究・感性		

第5章 武蔵野東中・元校長（インクルーシブ教育）

（拡大版B）

	協働とコミュニティの形成 ・学びあい、高めあう環境 ・生徒主体でつくる学校生活	
3 協働と自立	協働と発信 ・周囲を巻き込む ・生徒会活動の自治、リーダーシップの伸長 ・前例の踏襲にとられない創意	自己の人生と社会への挑戦と変容
2 多様性と内面化	他者理解と学びあい ・行事や学校生活での協働体験 ・「対話」による解決 ・他者の視点への想像力	試行錯誤と克服
1 主体性と自律	人とつながり、違いに気づく ・一人ひとりの違いを知る（誰もが尊重される存在） ・多様なコミュニティ ・本気の行事運営	視野の広がり
	B 他者への気づき	
	学びあい・対話	

（拡大版C）

	共生社会の創造 ・「混合教育」の経験からの実践	
3 協働と自立	共生社会に向けた新たな価値観の創造 ・オリジナルの問いと答え ・提案する力 ・社会・世界につながる	自己の人生と社会への挑戦と変容
2 多様性と内面化	学内コミュニティからの運用 ・学内コミュニティの共生社会 ・行動力 ・社会の出来事を検証する力をつける（ニュース・リテラシー） ・矛盾や疑問点を明らかにする	試行錯誤と克服
1 主体性と自律	社会・世界に視野を広げ、価値観を知る ・『生命科』『探究科』の学びからの広がり ・社会・世界の多様な価値観 ・身近な場の問題解決	視野の広がり
	C 社会・世界への気づき	
	検証・批判・創造	

以上、社会の変動を踏まえた教育の目的と手法に関するレポート第二部として「2030年SDGs達成年度以降の教育とは？」を探究しました。

教育という持続的な旅は、常に変化と進化の連続であります。本調査報告書が、神戸市の教育の発展の一助になれることを願っております。